地域づくり

本編

2024
5
ISSN1340-8917

明日を開く、地域活性化のための情報誌



特集　第28回ふるさとイベント大賞

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです

地域づくり　2024-5

CONTENTS

1　巻頭エッセー／「清流文化」による新たな地域づくり　古田　肇（岐阜県知事）

特集　第28回 ふるさとイベント大賞

第28回ふるさとイベント大賞表彰式・2024地方創生フォーラム in 東京を開催　2

大賞（内閣総理大臣賞）〈1団体〉
●うみぞら映画祭 in 淡路島【兵庫県洲本市】　4

最優秀賞（総務大臣表彰）〈1団体〉
●加子母木匠塾2022【岐阜県中津川市】　6

優秀賞〈3団体〉
●天童冬の陣 令和鍋合戦【山形県天童市】　8
●播州織産地博覧会【兵庫県西脇市】　10
●四万十川の春を彩る 元祖「こいのぼりの川渡し」【高知県四万十町】　12

ふるさとキラリ賞〈2団体〉
●勝浦さくら祭り【徳島県勝浦町】　14
●しまめぐり双六 IN 高島【長崎県長崎市】　16

【特集編では大賞・最優秀賞ほか、計24表彰を紹介～特集編のみに掲載される表彰は以下の通り】

●次点

しばれフェスティバル【北海道陸別町】
あっさぶふるさと夏まつり【北海道厚沢部町】
第15回 鬼小十郎まつり【宮城県白石市】
真夏のとうもろこし巨大迷路 ゴールドデント777WAKUYA2022【宮城県涌谷町】
福島わらじまつり【福島県福島市】
JAPAN WORLD FILM FESTIVAL2022 in 常陸大宮【茨城県常陸大宮市】
SUN-IN未来ウオーク【鳥取県倉吉市】
千年未来工藝祭【福井県越前市】
勝山左義長まつり【福井県勝山市】
オペラ「御柱」【長野県岡谷市】
第28回信州爆水RUN in 依田川【長野県上田市】
駅とまちを光でつなぐ杜のイルミネーション【岐阜県岐阜市】
秩父宮記念富士登山駅伝競走大会【静岡県御殿場市】
青野原俘虜収容所レミニセンス【兵庫県加西市】
NIGHT WAVE ～光の波プロジェクト in ZUSHI ～【神奈川県逗子市】
美作三湯芸術温度2022【岡山県】
音戸清盛祭【広島県呉市】

レギュラーリポート

18　地方創生実践塾　宮崎県新富町
農業を基盤としたまちづくり　日髙桃子

20　移住・定住・交流推進支援事業　静岡県下田市
伝統芸能の継承で新しいコミュニティを　土屋天澄

22　地域づくりは人づくり
当たり前の日常をなくさないために備える　細谷真紀子

24　首長の思い
「来てよし、住んでよし、育ててよし！
あなたのまち・諫早!!」の実現を目指して　大久保潔重（長崎県諫早市長）

グラビア
手前みそですが…　【滋賀県彦根市】

表紙　こいのぼりの川渡し

（高知県四万十町）

四万十町の西部に位置する十和地域の名物「こいのぼりの川渡し」は、新緑に染まる4月～5月にその姿を見ることができます。

四万十川の川面を渡る風を受けて悠然と泳ぐ色とりどりの鯉のぼりの数は500匹余り。この季節には、毎年多くの県外ナンバーの車やバイクが行き交う姿が見られます。

「こいのぼりの川渡し」の始まったきっかけは昭和48年、ソフトボールをしていた少年たちのこんな言葉でした。

「最近は僕らぁが、大きくなったき、家で鯉のぼりを上げてくれん」

それを聞いた地元体育会の大人たちが、翌年の昭和49年に地域の子どもたちから集めた約50匹の鯉のぼりを四万十川の岸から岸へとつるしたのです。そんな体育会の大人たちから子どもたちへの心のこもったプレゼントが「こいのぼりの川渡し」の始まりです。

平成9年には、ナイアガラで鯉のぼりの川渡しをするため、アメリカまで〝遠征〟するなど、国境を越え、交流の輪を世界へと広げています。

問い合わせ先＝四万十町役場企画課（0880・22・3124）

（写真提供＝四万十町役場企画課）



2㍍間隔で、上段に300匹、下段に200匹のこいのぼりが青空を泳ぐ

ESSAY

巻頭エッセー

「清流文化」による新たな地域づくり



岐阜県知事 ● 古田　肇

能登半島地震発生から早くも4カ月がたとうとしています。改めて、亡くなられた方々、その遺族の皆様に哀悼の意を表すとともに、いまだ仮設住宅や慣れぬ土地での生活にご苦労されている多くの被災者の皆様にお見舞い申し上げます。

発災から時間を置くことなく、本県および県内全市町村から被災地へ向けて支援隊を送らせていただきました。こうした災害に遭うたびに私は「明日は我が身どころか今日の我が身として捉え、あらゆる事態への対応策を練るよう」職員に話しておりますが、全ての自治体の首長および職員がそうした心構えの必要性を感じたと思います。と同時に、「住民の生命と生活を守り抜くこと」こそが、行政の最大の使命であることも強く認識する機会となったのではないでしょうか。

さて、そうした絶対的使命とともに行政の重要な役割の一つが「地域づくり」です。これは、「生まれた地域、生活する地域に誇りを持ち、生き生きと暮らし続けられるようにすること」だと言い換えても良いと思います。

「地域づくり」は行政の役割ではあるものの、行政だけでできるものではなく、県民の皆さんとの協働が欠かせません。その際、皆さんとの共通の思いや依ってたつもの（いわば「魂」、私は、これをしばしば「無形の力」と呼んでいます）が必要だと考えています。この「無形の力」こそ「地域のアイデンティティ」です。

では、岐阜県における「地域のアイデンティティ」は何でしょうか？

本県には、長良川、木曽川、揖斐川をはじめとする「清流」があまねく流れ、自然と人、人と人、地域と地域、そして時代と時代をつないでいます。「清流」は、県民にとってのアイデンティティであり、誇りや魅力の源です。

こうしたことから、県民にとってなじみ深い川の流れに例えつつ、「清流の国ぎふ」をコンセプトとして打ち出し、地域振興、健康福祉、観光などあらゆる政策を展開する「地域づくり」を進めてきました。

先ほど「無形の力」という言葉を紹介しましたが、地域づくりに「無形の力」を最も発揮しているのが「文化」だと思います。地域に根差した文化、古より連綿と続く芸術などは、人の心に温かさをもたらし、人と人とのつながりを強く感じさせる存在です。ＤＸやＡＩという言葉が象徴するデジタル化が、私たちの社会や生活を大きく変え、ともすれば冷たく無機質な雰囲気が覆いつつある現代にあってはなおのこと貴重な存在になっています。

今後の本県における「地域づくり」にあっては、これまでの「清流」に加え「文化」も欠かせない「無形の力」になってくると考えています。

そうした意味で、「『清流の国ぎふ』文化祭２０２４」（第39回国民文化祭・第24回全国障害者芸術・文化祭）と「清流の国ぎふ総文２０２４」（第48回全国高等学校総合文化祭）を開催することは、本県の「地域づくり」を新たな次元に高める起爆剤となると期待しているところです。

「『清流の国ぎふ』文化祭２０２４」のキャッチフレーズにもある「清流文化の創造」という言葉には、本県の「デジタル社会における地域づくり」への強い意思を込めています。

この秋、岐阜県全域が「文化」で彩られます。多くの方が来県され、多種多様な文化を体験いただくことを願うとともに、本県における「清流文化」による新たな地域づくりに期待していただきたいと思います。

第28回ふるさとイベント大賞表彰式・2024地方創生フォーラム in 東京を開催

地域活性化センターでは、2024年2月22日（木）にルポール麹町で「第28回ふるさとイベント大賞表彰式」と「2024地方創生フォーラムin東京」を開催しました。当日は表彰式の様子や講師の講演などをユーチューブで同時配信し、多くの方にご視聴いただきました。

■プログラム

13：00～　第28回ふるさとイベント大賞表彰式
14：30～　2024地方創生フォーラムin東京

【テーマ】「AI × 地方創生」
【基調講演①】村井 宗明 氏（東武トップツアーズ株式会社 CDO）
【基調講演②】鈴木 祥太 氏（ソフトバンク株式会社 Axross事業課）



表彰式の記念写真



地方創生フォーラム in 東京の様子



大賞を受賞した「うみぞら映画祭 in 淡路島」の関係者のみなさん

第28回ふるさとイベント大賞の概要

「ふるさとイベント大賞」は、全国各地で数多く開催されている地域の活力を生み出すイベントを表彰し、全国に向けて紹介することによって、ふるさとイベントのさらなる発展を応援することを目的に設けられた賞です。

今回で28回目を迎え、第27回までに、204の個性豊かなイベントを表彰しています。

今後も、ふるさとイベントの創造・発展を促すことで、地域固有の風土・伝統・暮らしを守るとともに、地域に対する愛着と誇りを育み、内外との交流につながる地域の活性化を目指しています。

●応募対象イベント

2022年7月1日から2023年6月30日までに開催されたイベント。

※現在の状況を考慮し、オンライン開催も対象。また、規模の縮小や内容の変更などがある場合でも、イベントを継続することで、そのイベントが本来持つ意味を伝えようと創意工夫を凝らしているものも含む。

以下のいずれかに該当するイベントは対象外。

①直近の5回（第23回～第27回）に大賞、最優秀賞等各賞を受賞したイベント

②継続性がなく1回の開催のみで終了するイベント

●選考過程

イベント主催団体から、市区町村等を通じ、都道府県へ応募書類を提出していただきました。今回の応募総数は92件でした。

応募されたイベントについては、イベントプロデューサーや学識経験者等により構成された「第28回ふるさとイベント大賞選考委員会」において、厳正な審査を行い、受賞イベントを決定しました。

なお、選考にあたり、右記の選考基準を基にイベント内容を総合的に判断しました。

●選考基準

	評価のポイント
企画	・地域資源を積極的に活用している。 （地域資源：風土、産業、食文化、伝統文化、歴史、特産物、建築物・構造物など） ・独創性にあふれ、新たな地域の魅力を創り出している。 ・多くの人を引き付ける魅力がある。 ・魅力を増すための創意工夫が顕著である。
運営	・地域住民が積極的に参加している（参加することに誇りを持っている）。 ・地域の内外を問わず、交流や連携が行われている。 ・継続して開催されており（継続される見込みがあり）、将来の発展性が見られる。
効果	・地場産業の振興や観光客誘致など、経済的な波及効果がある。 （低予算でも波及効果が大きいなど） ・地域の知名度アップに貢献している。 ・地域住民の郷土意識の高揚につながっている。 ・伝統文化の継承や新しい文化の創造につながっている。

選考委員長の総評　北川 フラム氏（株式会社アートフロントギャラリー代表取締役／アートディレクター）



ふるさとイベント大賞は第28回を迎え、ますますその存在感を人々に伝えていると思います。その土地のなりたち、歴史、生活、産業、祭など、それぞれの土地に固有の特徴を生かしたイベントは、土地に根ざした古くから続いた共同体の強さだけでなく、新しいネットワークの可能性を見せてくれています。

1月1日に起きた能登半島地震は今なお厳しい状態が続いており、地域の皆さんの苦境を思えば言葉もありません。しかしそのなかでの共同体の強さを私たちは映像や報道で知ることができました。第19回の最優秀賞を受賞した珠洲市においても、それらのイベントを通してその地に行かれた人たちにとっては人ごとではなく、手伝い、寄金、励ましは素晴らしいものがありました。

災害はどこかで起きます。ここでの心の寄せ方はひとつの希望でした。ふるさとイベント大賞はその地の人たちのものだけではなく、他の地の人々が心を寄せるものになっているのだと思います。

問い合わせ先

一般財団法人 地域活性化センター
地域創生・情報広報グループ地域創生課

〒103-0027 東京都中央区 日本橋 2-3-4
日本橋プラザビル13階

TEL 03-5202-6136　FAX 03-5202-0755
E-mail：event@jcrd.jp　HP：https://www.jcrd.jp/



大賞　内閣総理大臣賞

うみぞら映画祭 in 淡路島
2023年5月27日・28日
【開催場所】兵庫県洲本市・大浜公園



評価のポイント

●海辺の屋外シアターのアイデアが特徴的。主体的な住民参加が随所に見られる。鑑賞だけの目的にとどまらないすそ野の広がりを感じる。
●「海」という昔からの地域資源を令和の時代にアップデートした好例。清掃活動、放置竹林などSDGsへの目配りをきかせた企画である。
●若い女性層の参加者が多いというデータは、特筆すべき成果だと感じる。地域イベントが次世代に向けつながっていく将来性は高く評価できる。

2024年開催日程

■開 催 日：2024年4月27日・28日・29日
■開催場所：兵庫県洲本市・大浜公園
■問い合わせ先
・団 体 名　海の映画館をつくろうプロジェクト実行委員会
・住　　所　〒656-0017　兵庫県洲本市上内膳304-1
・電話番号　0799-20-6212　・URL　https://umizora-cinema.com

大賞

第28回
ふるさとイベント大賞

内閣総理大臣賞

うみぞら映画祭 in 淡路島

「うみぞら映画祭」は、淡路島の海の上に440インチの巨大なスクリーンをクレーン２台でつり下げ「海の映画館」をつくり、波音を聞きながら砂浜から映画を楽しむ野外上映イベントです。映画祭期間中は、「海の映画館」の他にも、花火やナイトマーケット、SUPなどのマリンアクティビティ、テントサウナ&ドラム缶風呂体験、乗馬体験、地元企業のワークショップなど一日中海辺で楽しめるイベントとなっています。

2023年5月開催時の来場者数は２日間で約7,000人。来場者の多くは女性で男女比は女性66%、男性34%。また、20~24歳までの女性が多く、イベント後にSNSで写真や動画が広く発信されました。また、日本財団「海と日本プロジェクト・CHANGE FOR THE BLUE」プロジェクトとも連携し、来場者の方全員にごみ拾いをしていただき、海洋ごみ問題の啓もうにつながるムービーも上映するなど、海を守る取り組みも継続して実施しています。

2022年までは実行委員会主体で行う内容が多かったのですが、2023年からは淡路島のいろんな施設や飲食店、学校と一緒になってイベントを行うカタチにしました。たとえば、SUPやBBQエリア、テントサウナ&ドラム缶体験、乗馬体験などは普段からマリンアクティビティやアウトドア体験施設を運営している施設やチームにお任せしたり、タイルの絵付けワークショップは淡路島の伝統的なタイルメーカーさんに実施していただいたりしました。地元の高校生もボランティア活動に積極的に参加していただきました。淡路島は放置竹林の問題も深刻なので、放置竹林を使ったワークショップなども実施。今後継続的に行っていきたいと思っています。

主催者メッセージ



海の映画館をつくろうプロジェクト実行委員会／
株式会社海空
イベントプロデューサー
大継 康高さん

「うみぞら映画祭」は、白砂青松の風光明媚（めいび）な海水浴場である洲本市の大浜公園で毎年行っている野外上映イベントです。多くの人に美しい大浜公園で波音を聞きながらのんびりとした時間を過ごしてほしいという思いからスタートしました。星空のもと波音を聞きながら砂浜で観る映画は格別です。また、映画祭のメインビジュアルにもなっている「海の映画館」と水上花火のコラボ演出も必見です。









開催DATA

自治体名	兵庫県洲本市
自治体人口	41,340人 ※2023年11月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	海の映画館をつくろうプロジェクト実行委員会
開催回数	7回
開催日	2023年5月27日・28日
開催場所	兵庫県洲本市・大浜公園
観客数	約7,000人（2日間）



評価のポイント

●自然環境保護や貴重な資源活用の地域産業とも結びつく大きな「なりわい」の一貫した学習体験が魅力。学生を中心とした外来参加者と受け入れの地域住民側との相互の協力によるところが好印象。
●小学校の野外ステージ、公園の東屋の建設や、中学校の図書館、宿泊所の改修など、学生たちが制作した成果物がそのまま残り地区で活用されている。
●この地で新鮮な学びを得た若者たちが全国の地域づくりの現場で活躍されていることを想像すると、地域文化の存続に大きく貢献していると感じる。

次回開催日程

■開 催 日：2024年8月
■開催場所：中津川市加子母地内
■問い合わせ先
・団 体 名　加子母むらづくり協議会（事務局:NPO法人かしもむら）
・住　　所　〒508-0421 岐阜県中津川市加子母3519番地2
・電話番号　0573-79-3669　・URL　https://www.kashimokusho.com/

最優秀賞

第28回
ふるさとイベント大賞

総務大臣表彰

加子母木匠塾（かしももくしょうじゅく）2022









加子母木匠塾は、伊勢神宮式年遷宮御用材である木曽ヒノキを産出する中津川市加子母で、1995年に大学教授の先生方が中心となり、地元の林業・木材関係者の協力のもと合同ゼミ形式の木造建築セミナーとして始まりました。現在では京都大学、京都工芸繊維大学、京都芸術大学、東洋大学、立命館大学、金沢工業大学、名城大学、滋賀県立大学の８大学から毎年300名もの大学生が集結し、地域全体をフィールドとして、木造建築実習を中心に、山村文化の継承、自然環境の保護、森林空間の整備や地域材利用の推進に取り組んでいます。

活動のメインは夏に行う木造建築実習ですが､その年の実習が終わると、翌年度に向けて各大学内に、幹事・棟梁・設計・生活・広報・催事のリーダー、そして全大学を総括する総幹事、副総幹事が選出され、学生が主体となり準備が始まります。地域の要望に基づき製作課題が決まり、要望の聞き取りと指導工務店との打合せを重ねながら製作プランを決めていきます。限られた予算のなかで、いかに要望に応えることができるか、設計・施工担当者が中心となり、毎月の現地で行う打合せを重ねながら具体化していきます。ただ単に木造建築物を作るだけでなく、地域交流イベントなどの企画や地域の伝統行事などにも積極的に参加し、学生が地域と交流することで、地域コミュニティの中に溶け込みながら机上では学べないものを感じ取れるきっかけとなっています。

加子母木匠塾は今年で30周年を迎えます。少子高齢化等により農山村のコミュニティが衰退しつつある状況ですが、これからの日本を担う若者たちが、山村地域での体験や交流を楽しむとともに、地域づくりのサポートを行う外部人材でもあるという二つの要素を兼ね備えた存在となっており、木造建築を学ぶという木匠塾の本来の目的以上の価値が学生と地域の双方に生まれ無限の可能性を秘めたイベントになっています。

主催者メッセージ



加子母木匠塾
2021・2022学生総幹事
山本 明斗さん

私たちの製作した作品群はもちろんですが、1894（明治27）年に創建され築130年を迎える芝居小屋「かしも明治座」がおすすめです。2015（平成27）年には樽葺（くれぶ）き屋根に復元され、予約すれば、普段は見ることができない舞台裏や楽屋、廻り舞台、奈落なども見学できます。また、毎年秋には地元役者による加子母歌舞伎公演が行われており、私も役者として出演させていただきました。

開催DATA

自治体名	岐阜県中津川市
自治体人口	75,391人 ※2022年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	加子母むらづくり協議会
開催回数	28回（2022年時点）
開催日	2022年8月8日~26日 （合宿実施期間）
開催場所	中津川市加子母地内
観客数	約1,500人（うち学生は約300人）



評価のポイント

●子どもたちに体験的な食育を通して地域の食文化を伝える試みやイベントを支える立場での参加機会がある。これらが自然な形でのイベントの継承・継続につながっている。
●地域に新たなにぎわいをもたらしている。ともすれば、よくある「食のイベント」に見えてしまうが、今後も「地域性」を生かし、天童ならではのイベントとして成長していくことを願う。
●県内の大学生やボーイスカウトも運営ボランティアとして参画しており、地域に根差したイベントになっている。

次回開催日程

■開 催 日：令和6年11月中旬～12月上旬（予定）
■開催場所：未定
■問い合わせ先
・団 体 名　天童商工会議所
・住　　所　〒990-0013　山形県天童市老野森1-3-28
・電話番号　023-654-3511　・URL　https://nabegassen.net/

優秀賞

第28回
ふるさとイベント大賞

地域活性化センター会長表彰

天童冬の陣
令和鍋合戦

武器を使わずに戦う、味で勝負の平和な合戦。

「鍋合戦」は平成８年から天童市の「初市」の活性化を目的にスタートしたイベントで、規模や出店数の拡大などにより、今では天童市内の交流人口を増やし、地域経済の活性化を目的とした天童市・山形県を代表する冬の風物詩・食の一大イベントとなっております。

山形県内はもとより、全国や東北各地の自慢の鍋料理が集結し、味を競います。来場者はお好きな鍋を３杯たべるごとに、天童名産の将棋駒を受け取ることができ、気に入った鍋へ投票を行います。集計後、上位５団体を選出し、審査員による実食審査で最終の順位を決定します。選ばれた１位の鍋を「鍋将軍」、２位を「鍋の局（つぼね）」と設定し、賞状と、天童市の名産である「置き駒」にそれぞれの名称を記載した記念品を授与しております。

またステージイベントも開催しており、ダンスの披露やゲストによるパフォーマンス、トークショーを行い、イベントをさらに盛り上げております。

第26回開催時は、新型コロナウイルスの影響によりイベント自体は中止となりましたが、代替イベントとして市内の飲食店を舞台に独自の鍋を提供していただく「スタンプラリー型」で実施しました。市内の飲食店をまわり、鍋を食し、スタンプを押印の上、投票すると抽選で豪華景品が当たるイベントとして開催しました。

第28回から通常の会場イベントも復活し、スタンプラリー型とのハイブリッド開催でイベント自体もパワーアップしました。令和６年度はスタンプラリー型を「令和鍋めぐり」と名称を替え、より皆様に親しんでもらえるイベントを目指しております。

鍋めぐりでも投票と審査員による審査を行っており、飲食店をお城と見たてて、１位の鍋を「鍋ノ大天守」、２位を「鍋本丸」として賞状と記念品の授与を行っております。

次回30回を迎える「天童冬の陣　令和鍋合戦」、ぜひ皆様のご来場をお待ちしております。

主催者メッセージ



天童商工会議所青年部
令和鍋合戦公式キャラクター
なべ丸くん

天童冬の陣 令和鍋合戦は武器を使わず、味で勝負の平和な戦いじゃ！

「鍋将軍」の座を目指し、各地からオリジナルのアツアツ鍋が一堂に会する、山形県天童市の冬の食の一大イベントである。

ぜひ、皆の投票で戦いを盛り上げるのじゃ！ わしも鍋奉行も待っておるぞ！







開催DATA

自治体名	山形県天童市
自治体人口	61,052人 ※令和4年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	天童商工会議所青年部
開催回数	29回
開催日	令和5年11月19日
開催場所	山形県総合運動公園中央広場
観客数	約12,000人






評価のポイント

●地産地消は素材の魅力やモノづくりの過程を身近なものにし、暮らしに欠かせない体験を醸成する上で大切なことだと、あらためてこのイベントを通じて感じた。
●多様な世代の人々、地元と他地域が一緒になって企画を工夫する循環が生まれ、今後の発展の可能性を感じられる手作り感いっぱいのイベントである。
●地元の人たちが楽しみながらあの手この手で企画を育てる「熱意」が伝わってくる。移住者や住民の活躍もあり、まさにシビックプライドを取り戻す強力なエンジンになっている。

次回開催日程

■開 催 日：令和6年5月26日
■開催場所：西脇市役所～旧来住家住宅（まちなかエリア）
■問い合わせ先
・団 体 名　播州織産地博覧会実行委員会（事務局：西脇商工会議所）
・住　　所　〒677-0015　兵庫県西脇市西脇990
・電話番号　0795-22-3901　・URL　https://ban-paku.com/

優秀賞

第28回
ふるさとイベント大賞

地域活性化センター会長表彰

播州織産地博覧会

播州織産地博覧会「播博（ばんぱく）」は、西脇市役所のまちなか（中心市街地）エリアへの移転を契機とした中心市街地の活性化を考える「まちなか未来ワークショップ」で地元有志から発せられた「織物のまちに、織物の名物市を！」という思いが形となって、平成30年にスタートした播州織の生地マルシェを中心としたイベントです。

播博会場となるまちなかは、かつては北播磨地域有数の繁華街で、商業施設や飲食店が立ち並ぶアーケード街でしたが、鉄道路線の廃止や大型商業施設の立地、人口減少の影響などでシャッター街となり、空き家や空き店舗が増加していることが課題でした。

また、西脇市の基幹産業である「播州織」は、江戸時代からの家内制工業から明治期に工業生産へと移行し、戦後大きく発展しましたが、円高の進行や新興国の台頭に伴って競争力が失われ、生産数量は最盛期の30分の１にまで減少しています。また、アパレルなどに生地を提供する素材産業であったため、知名度・ブランド力が低いことも課題でした。

こうした中、「まちなかの空き店舗や空き地を活用してにぎわいを創出するイベントができないだろうか」という思いと、「播州織の産地なのに生地を購入できる場所が少ない」「播州織をもっと多くの人に知ってほしい」という課題意識が重なり、播州織関係者や地域住民がサポートする形で、まちなかの空き店舗や空き地を活用した生地マルシェが誕生しました。

平成30年の第１回には予想の10倍近い5,000人の来場があり、新型コロナウイルス感染症による２度の開催中止を経て、４回目となる令和５年は、全国各地から約8,500人が訪れる魅力あるイベントに成長しました。また４回目には初となる播州織オープンファクトリーも同時開催し、「播州織の産地を訪れてもらったのだから、ものづくりの現場もぜひ見てほしい！」という当初の思いも実現できました。

今では、イベントを契機に、まちなかエリア、空き店舗の再評価につながり、会場エリアの空き店舗をリノベーションしたショップが複数オープン。目に見える形でまちなかの活性化につながっています。

主催者メッセージ



マルシェ会場となるのは、播州織全盛期の面影を残す“まちなか”。昭和レトロな建物や喫茶店などまちの歴史が感じられるのも「播博」の魅力の一つです。ぜひ、会場にお越しいただき、風情あふれるまちなみと色柄豊かな播州織をお楽しみください。

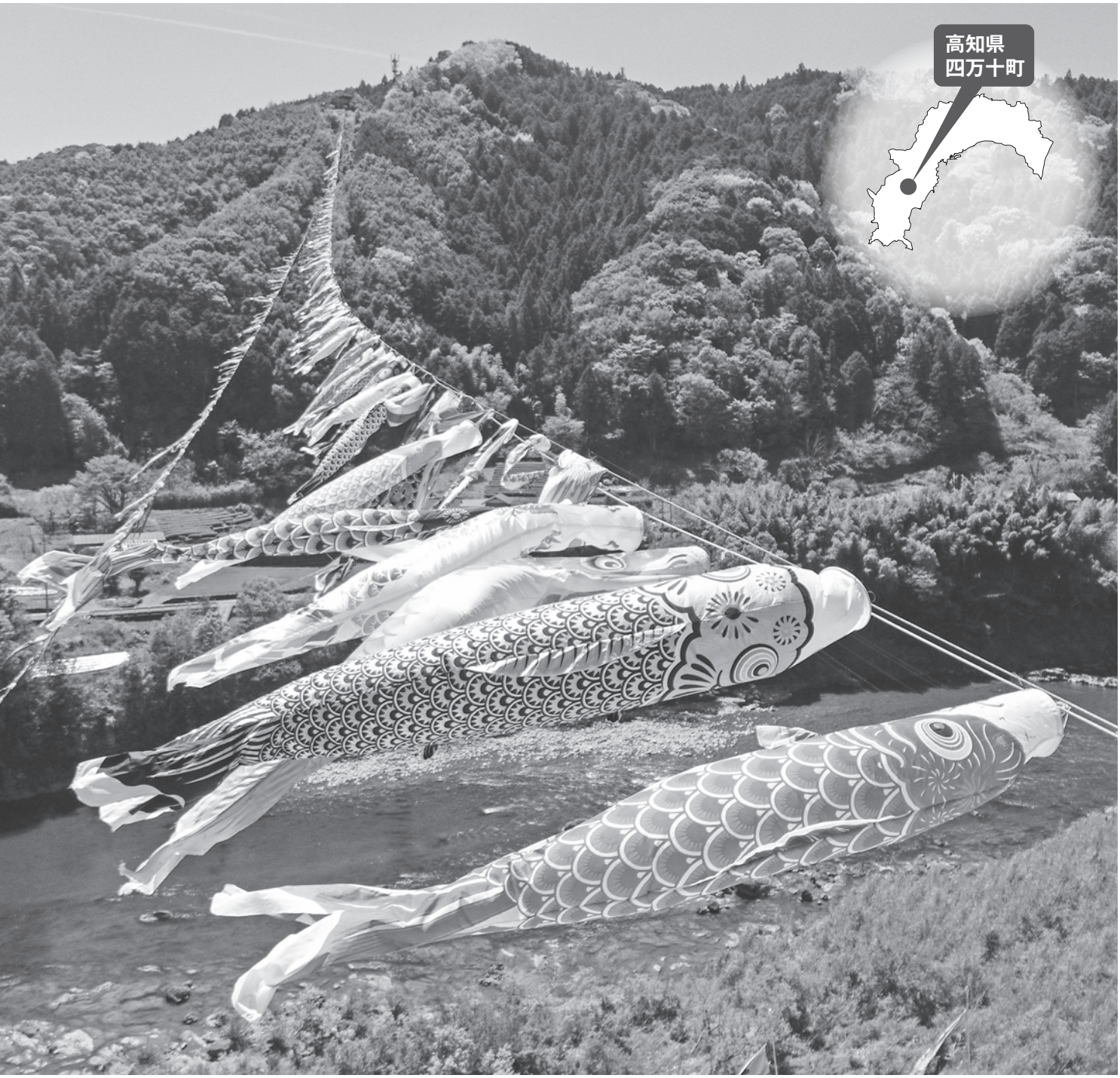
播州織産地博覧会実行委員会代表
（秋田商店／布工房 風花～ kazahana ～）

秋田 恵さん



開催DATA

自治体名	兵庫県西脇市
自治体人口	38,185人 ※令和5年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	播州織産地博覧会実行委員会 （事務局：西脇商工会議所）
開催回数	4回（新型コロナにより2回中止）
開催日	令和5年6月4日
開催場所	西脇市役所～旧来住家住宅 （まちなかエリア）
観客数	約8,500人



評価のポイント

●広がりのある河川敷を利用し、地域の子どもたちに向けて夢や感動を届ける大胆で素朴な思いが半世紀にわたり受け継がれていることに感銘を受ける。
●こいのぼりがずらりと並ぶ様子は壮観。家庭で不要になったこいのぼりをあげるところからはじまったという点が今の時代にとても合っていると感じる。
●「こいのぼりを四万十川にかける」というシンプルかつ視覚効果の強いアイデア。地元の方々により、約半世紀にもわたって取り組まれ続けた持続性に感動した。

令和6年開催日程

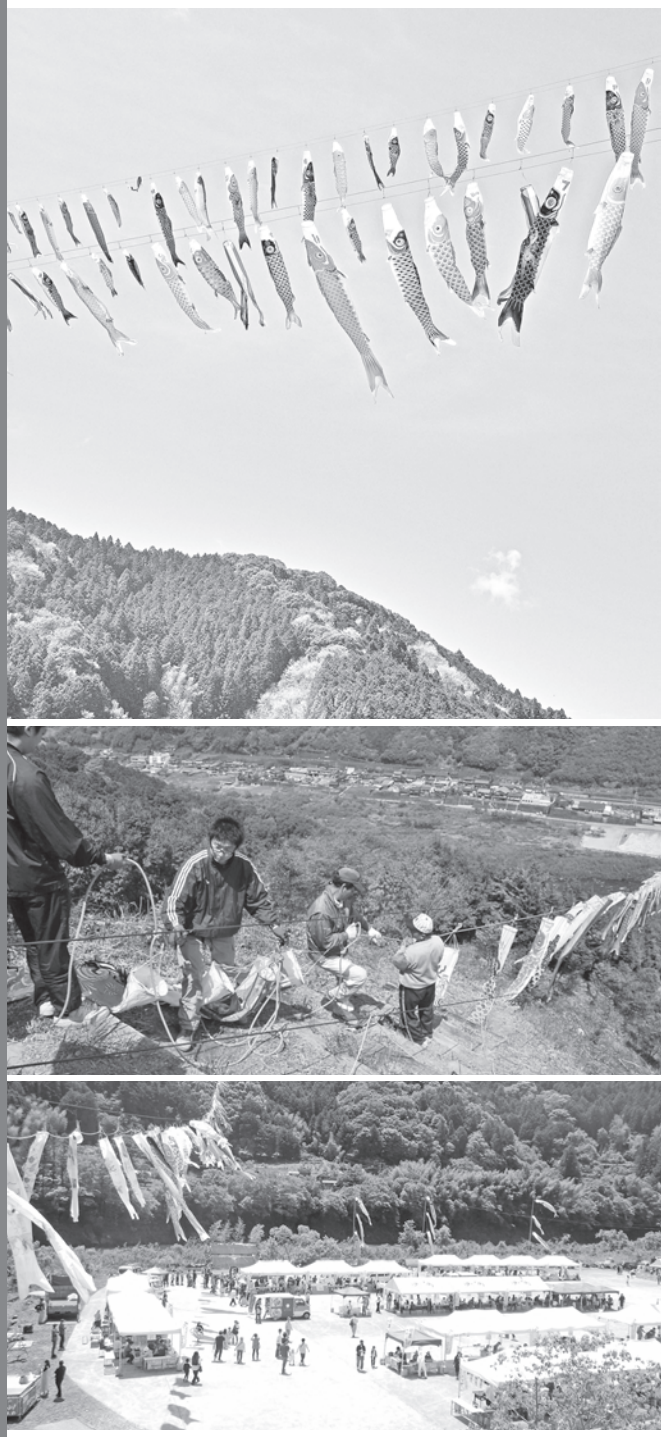
■開 催 日：令和6年4月13日～令和6年5月12日
■開催場所：こいのぼり公園（四万十町十川）
■問い合わせ先
・団 体 名　四万十町十和地域振興局地域振興課
・住　　所　〒786-0504 高知県高岡郡四万十町十川145-3
・電話番号　0880-28-5111　・URL　https://www.town.shimanto.lg.jp/

優秀賞

第28回
ふるさとイベント大賞

地域活性化センター会長表彰

四万十川の春を彩る 元祖「こいのぼりの川渡し」



このイベントは、中山間地域もたくさんの子どもたちでにぎわっていた昭和49年、当時の旧十和村（とおわそん）の若者たちが、各家庭であげなくなったこいのぼりを四万十川にまとめてあげることで、子どもたちの健やかな成長と将来の躍進を願い、始まったものです。

現在では類似イベントが全国で多く見られますが、当時は他に類を見ない、さらには日本最後の清流と言われる四万十川をこいのぼりが横断するイベントということでさまざまなメディアにも取り上げられるようになってきました。

平成９年には旧十和村に赴任していた国際交流員の発案により、米国の子どもたちにもこいのぼりを見せたいという思いからナイアガラでこいのぼりの川渡しを実施しました。作業は難航しましたが、地元警察を筆頭に多くの現地住民の力を借りて、約200匹のこいのぼりがナイアガラの上空を彩りました。

回を重ねるにつれて、全国から使われなくなったこいのぼりが送られてくるようになり、同時に規模を拡大し、今では四万十川を横断する元祖「こいのぼりの川渡し」を一目見ようと全国から多くの観光客が訪れるイベントへと発展していきました。また、このイベントは、住民ボランティアや地元企業の支援により成り立っており、地域住民の郷土意識の高揚にもつながっています。

新型コロナウイルス感染症の位置づけが変更になって最初のゴールデンウィークを迎えることになった令和５年は、こいのぼりの川渡しに併せて毎年実施しているイベント「よってこい四万十」の充実や、新たにツアー企画も実施し、期間中は多くの観光客でにぎわいをみせました。

また、50回の節目を迎える令和６年に向け、町の支援を受けて川渡しに必要な設備の大規模改修を行いました。全国の皆さん、ぜひ四万十町にお越しください。

主催者メッセージ

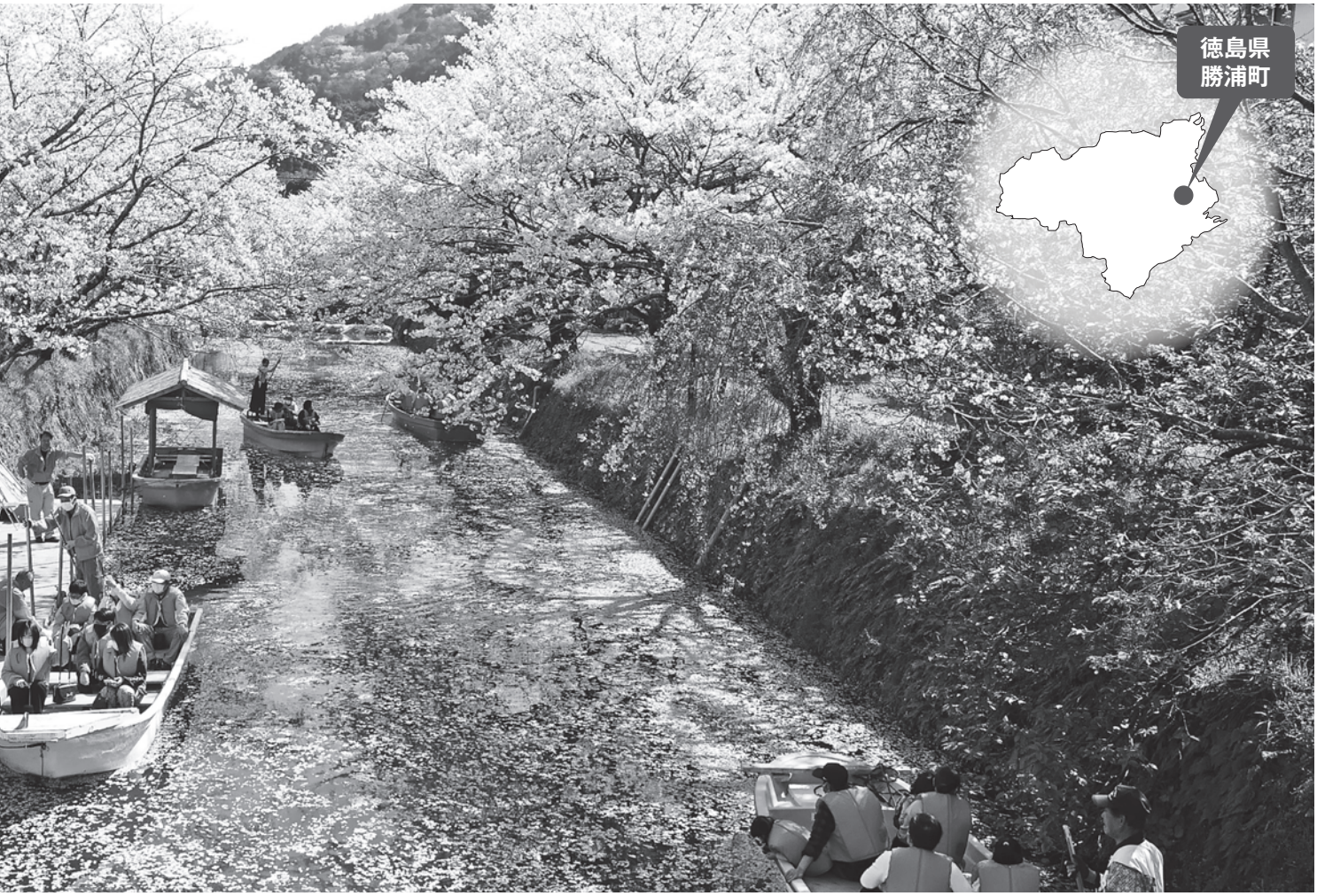


十川（とおかわ）体育会会長
宮田 光さん

このイベントの最大の見所は、山々が新緑に染まる4月中旬から5月中旬にかけ、約500匹のこいのぼりが四万十川上空を優雅に泳ぐ姿を一望できることです。また、こいのぼり公園対岸の山の中腹にある展望台からは四万十川とこいのぼりの川渡しを見下ろすことができ、その姿は四万十川をたくさんのこいが泳いでいるようにも見えます。

開催DATA

自治体名	高知県四万十町
自治体人口	15,397人 ※令和5年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	主催団体　十川体育会
開催回数	49回
開催日	令和5年4月15日～ 令和5年5月14日
開催場所	こいのぼり公園（四万十町十川）
観客数	約33,000人







評価のポイント

●河川沿いへの地元住民の方々の桜の植樹を受けて、一年に一度、その歴史に目を向け多くの参加者と共有できる家族の輪をつなぐような企画が好印象。
●日の暮れるアフター 5の時間帯に華やかな光の趣向が添えられることで、多くの人々と過ごせる時間が大切にされていると感じる。
●桜といえば日本全国にある「ありがちな資産」であるが、予算をかけずに創意工夫を凝らし、キラリと光る活用ができている。

2025年開催日程

■開 催 日：2025年3月25日～4月10日（予定）
■開催場所：「生名ロマン街道」周辺
■問い合わせ先
・団 体 名　生名ロマンの会
・住　　所　〒771-4303 徳島県勝浦町生名字山ノ神39-1 戸川幹雄方
・電話番号　090-8970-6728　・URL　https://awa-sakura.jp

ふるさとキラリ賞

第28回
ふるさとイベント大賞

選考委員会表彰

勝浦さくら祭り

1975年の河川改修工事完成を機に、地元住民が川の両岸に植えた桜の苗木450本が、年月を経て延長１㌔の見事な桜並木となりました。過疎高齢化が進むなかで、先人の精神を継承し、地域の宝を守りながら、住民の絆を強め活性化につなげたいとの思いで、2003年に「生名ロマンの会」を結成し、翌年から「勝浦さくら祭り」を開始。「見る桜」から「体験できる桜祭り」へと進化してきました。

徳島県内を代表する桜並木に加え、未来を担う「子供たちの学び、成長、夢」を主題に、川沿いの立地環境を生かして家族で楽しめるイベントとしています。今回は、川に浮かべた梶取船からのお花見、アメゴ（アマゴ）の釣り堀、トロッコ列車、LED電灯によるライトアップ、宝探し、ステージイベントなどを行い、徳島県ゆかりの写真家、大杉隼平氏が勝浦町内で撮った写真を川に展示しました。

２週間余りの期間中、例年の約３万人（2016年頃は約１万人）を上回る約５万人（町人口の約10倍）を集客し、地場産品等の売店や近隣のJA産直市、道の駅等の売上げ増にも貢献しました。また、近隣でほぼ同時期に開催される「阿波勝浦ビッグひな祭り」とも連携し、2018年には台湾からのクルーズ船客１便約2000人、2023年にも台湾からの航空チャーター便客６便計178人が来場するなど、夢や誇りの持てる地域づくり、勝浦ファンの増や町のイメージアップに大いに寄与しています。

「生名ロマンの会」は、現在、生名地区住民を中心に約90人が会員（ボランティア）で、町内の道の駅や総合型地域スポーツクラブ、四国大学（徳島市）などとの連携、地元高校生のボランティア参加など、協力者の幅を広げながら運営してきました。また、交通渋滞緩和のための駐車場整備や遊山広場整備等の資金をクラウドファンディングで募り、目標額を上回る資金を調達するなど、多くの人に支えていただいています。

主催者メッセージ



生名ロマンの会会長
戸川 幹雄さん

徳島県内を代表する川沿いの桜並木を生かし、地域の宝を守りながら、住民の絆を強め活性化につなげたいとの思いで「さくら祭り」を開催しています。川に浮かべた梶取船からのお花見やアメゴ(アマゴ)の釣り堀、トロッコ列車など楽しさ満載。近隣で開催の「阿波勝浦ビッグひな祭り」とともに、ご家族で楽しんでいただけます。





開催DATA

自治体名	徳島県勝浦町
自治体人口	4,825人 ※2022年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	生名ロマンの会
開催回数	20回
開催日	2023年3月25日～4月10日
開催場所	徳島県勝浦町生名「生名ロマン街道」周辺
観客数	約5万人



評価のポイント

●双六マップの案内で島内を楽しく回るアイデアがオリジナリティの高い工夫となり、受け入れるホスピタリティとしても相乗効果を生んでいる。
●住民主体で知恵を出し合い、背伸びせずにおもてなしを行う取り組みは、各地の参考になる。高島ならではの「資産」の活用方法をもう一工夫すると、さらに素晴らしいイベントになると感じる。
●双六のマップを活用することで、地域の特産から文化を巡る楽しさを引き出している。

令和６年開催日程

■開 催 日：令和6年3月9日
■開催場所：高島町
■問い合わせ先
・団 体 名　高島地区まちづくり推進協議会（高島地域センター内）
・住　　所　〒851-1392 長崎県長崎市高島町1728-1　・電話番号　095-896-3110
・URL　https://www.city.nagasaki.lg.jp/shimin/121000/121100/p002935.html

ふるさとキラリ賞

第28回
ふるさとイベント大賞

選考委員会表彰

しまめぐり双六（すごろく）IN高島







長崎市高島町は、長崎港の南西約14･5㌔の洋上に浮かぶ高島をはじめ、端島（軍艦島）、中ノ島、飛島の四つの島からなり、高島だけが有人島です。町の総面積は、四つの島を合わせて、1・34平方㌔で、長崎市と合併する前は日本で一番小さな町でした。

かつて高島は、端島とともに炭鉱で栄えた町で、かのトーマス･グラバーも佐賀藩との炭坑事業の共同開発・経営のためこの島を訪れました。高島炭坑と端島炭坑は最先端の設備を次々に導入して出炭量を増やし、日本の近代化を支えてきました。石炭採掘最盛期には高島・端島合わせて約22,000人が住み、島には高層アパートが建ち並んでいましたが、エネルギー革命により燃料の主役が石油に代わり、昭和49年に端島炭坑が閉山し、高島炭坑も昭和61年に閉山しました。現在では人口が282人と激減し、交流人口増加および定住促進を図るため、さまざまな施策を行ってきました。

施策の１つとして平成23年度から開催している「しまめぐり双六IN高島」は、島全体を双六のマップに見立て、サイコロを振って巡り、ゴールを目指すイベントです。各ポイントでは、特産品の「高島フルーティートマト」や「トマトパスタ」「トマトドレッシング」などの試食で食の魅力、「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産の一つである端島（軍艦島）・高島炭坑（北渓井坑跡）をはじめとする史跡の魅力、きれいな海を目の当たりにして食べるBBQ等でアウトドアの魅力、ボランティアスタッフとして参加している島民とのふれあいなど、双六という遊びを取り入れて、島の魅力を余すことなく発信しています。

イベントの開催を楽しみにするリピーターも増え、夏の海水浴客等、交流人口の増加の中心的な役割を担っています。

主催者メッセージ



高島地区まちづくり推進協議会会長

松尾 保さん

高島までは長崎港から高速旅客船に乗って約35分。ちょっとした船旅気分を味わえます。双六ではサイコロを振り、世界遺産の軍艦島（端島）、北渓井坑跡、特産品のトマト等を試食できるポイントがあり、高島を満喫しながらゴールを目指します。ゴール後にはBBQ、特産品の抽選会等、1日中楽しめるイベントとなっています。

開催DATA

自治体名	長崎県長崎市
自治体人口	395,842人 ※令和5年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	高島地区まちづくり推進協議会
開催回数	13回
開催日	令和5年3月11日
開催場所	高島町
観客数	約64人

地方創生実践塾　宮崎県新富町

農業を基盤としたまちづくり
―世界一チャレンジしやすいまちを目指して―

一般財団法人こゆ地域づくり推進機構
経営企画室ディレクター
● 日髙　桃子

地域活性化センターでは、地方創生の担い手となる人材の養成を目的に「地方創生実践塾」を実施している。2023年12月8日（金）から12月9日（土）に宮崎県新富町で実施した実践塾について、主任講師の日髙桃子氏にご報告いただいた。（企画・人財育成グループ）

新富町は、人口1万6248人、面積61・7平方キロで宮崎県のほぼ中央部の沿岸地帯に位置し、南側に隣接する宮崎市の中心部まで車で30分、宮崎空港へのアクセスも良好である。町の中央部に航空自衛隊新田原基地があり国土防衛の役割を果たしている。主産業は第一次産業で畜産や施設園芸、養鰻が盛んである。

2017年に一般財団法人こゆ地域づくり推進機構を設立した。当財団は2018年に内閣府の地方創生優良事例に選出され、2021年にはふるさとづくり大賞で団体表彰（総務大臣表彰）を受賞している。

今回の実践塾では「農業を基盤としたまちづくり」と題してフィールドワークをメーンとした地方創生実践塾を開催した。

新富町の農業について

新富町の農地面積は、61・53平方キロで東南部から西南部にかけての一ツ瀬川流域には平坦な水田地帯と、これに連なる北部台地に畑地帯が広がっている。農地面積は約2160ヘクで水田と畑がほぼ半分ずつ。水田地帯からはコシヒカリを主体とした早期水稲とピーマン、きゅうり、トマト、メロン等の施設野菜が作られている。畑地帯では、原料用甘しょ（サツマイモ）、だいこん、茶、洋らん等の栽培の地、養鶏、肉用牛、酪農など畜産が盛んである。

これからの農業の在り方を知る

1日目は、講座を二つ、フィールドワークを三つ行った。

開校式の後、主任講師の日髙が新富町および財団を紹介した。その後、合同会社オーガニックファームZEROの宮本恒一郎氏が①有機農業について②飲食業「有機米農家おにぎり宮本」について③農作物の加工および海外輸出について―講義した。実際に宮本氏の作ったお米を食べながら聴講するのは貴重な経験だったようで、参加者からも喜びの声が聞かれた。

ランチ後は、本部農場を視察した。本部農場は〝牛にやさしい酪農〟を目指した農場で、作業効率化の為にICTやロボットなどを積極的に取り入れたり、和牛ET（受精卵移植）やバイオガスプラントを導入したりしている。参加者は次世代閉鎖型牛舎や哺乳ロボットに強い関心をもった様子で活発な質疑応答がなされた。

次に一般社団法人ニューアグリベースを視察した。当団体は、2021年に新富町と児湯農業協同組合が一体となり、互いに情報の共有を図り、次世代につなぐ人材を育成し、企業等と連携しながら攻めの農業を実施することによって町内農家の生産活動を支援することを目的として設立された。ニューアグリベースと連携している企業のうち、今回は、企業版ふるさと納税で新富町と連携協定を締結してペプチドの研究を行っている三洋化成工業株式会社と、有機質活用型溶液栽培などの循環型栽培による環境負荷および化学肥料の低減化を図るOATアグリオ株式会社の実証ハウスを見学した。

その後、AIを活用したスマート



ニューアグリベースの実証ハウス前で

農業ＤＸを推進するためにピーマン等の自動収穫ロボットの開発を行なっているＡＧＲＩＳＴ株式会社を視察した。今回は、会社オフィスで秦裕貴氏より会社概要の説明があった。参加者からは、ロボット開発や資金調達についての話など多岐にわたる話が展開された。その後、ほ場に移動して実際に収穫ロボットが動いている様子を見学した。

夜には、新富町内の民宿「初音」にてビュッフェ形式の交流会が行われ参加者は宮崎の郷土料理を楽しみながら、引き続き同席いただいた講師陣をはじめ新富町役場の職員と活発な意見交換が行われた。



町の施策について講義する小嶋町長

ウェルビーングなまちを目指して

２日目は、総合交流センターきらり大集会室を会場にして講義およびグループワークが行われた。

はじめに、新富町の小嶋崇嗣町長が新富町の取り組みやこれからの展望について講義した。町の施策については、サッカースタジアムを例とした拠点の作り方、庁舎内改革・デジタル化、財政改革についての話があった。特に企業版ふるさと納税と地域おこし協力隊の採用に関しての話題が盛り上がった。



講師陣と参加者による記念撮影

その後、新富町役場産業振興課の高山研二課長補佐とニューアグリベースの児玉洋平業務執行理事が新富町の農業について講義。主要作物や認定農家についての話があり、参加者からも専門的な質問が多数上がっていた。

午後は、４グループに分かれ「今回の実践塾で学んだこと・これから取り組みたいこと」をテーマに40分間意見交換をした後、１グループ10分ずつプレゼンをしてもらった。互いに学びや気付きを共有し活発な意見交換が行われている姿が印象的だった。

今回の実践塾ではフィールドワークをメーンに講座を行い、実際に現場を見てもらうことに重点を置いた。実際に現場を訪れ生産者や事業者から話を聞くことで各々の理解度が上がり、今後の事業に少しでも役に立つことができるのではないかと思う。

地方創生実践塾（宮崎県新富町）の概要

テーマ：農業を基盤としたまちづくり
　　―世界一チャレンジしやすいまちを目指して―

主任講師：一般財団法人こゆ地域づくり推進機構 日髙桃子氏

１日目：12月８日（金）
- 講義①「農業を基盤としたまちづくり～世界一チャレンジしやすいまちを目指して～」
  - 主任講師：日髙桃子氏
- 講義②「未来につながる有機農家の挑戦」
  - 講師：オーガニックファーム ZERO 宮本恒一郎氏
  - フィールドワーク①講師：本部農場 本部博久氏
  - フィールドワーク②講師：一般社団法人ニューアグリベース 児玉洋平氏
  - フィールドワーク③講師：AGRIST 株式会社 秦裕貴氏

２日目：12月９日（土）
- 講義③「ウェルビーイングな町を目指して～私の自治実践論～」
  - 講師：新富町長 小嶋崇嗣氏
- 講義④「新富町の農業について①」
  - 講師：新富町役場産業振興課 高山研二氏
- 講義⑤「新富町の農業について②」
  - 講師：一般社団法人ニューアグリベース 児玉洋平氏
  - グループワーク主任講師：日髙桃子氏

移住・定住・交流推進支援事業

（静岡県下田市）

伝統芸能の継承で新しいコミュニティを

―日本舞踊や三味線の体験会―



下田伝統芸能普及促進委員会委員長 ● 土屋 天澄

開国の歴史文化と豊かな自然 人々を魅了する観光地

下田市は静岡県の伊豆半島の南東部に位置しており、東京都心からは１４０キロ圏、熱海、三島からは50キロ圏にあります。歌の「天城越え」で有名な天城山系の南端から太平洋に至る豊かな自然に恵まれたまちです。天城山系から続く急峻な山々と47キロに及ぶ素晴らしい海岸線は下田を特徴付ける美しい景観をかたちづくり、下田市の貴重な財産として社会・経済の基盤を支え、年間を通じて多くの方に訪れていただいており観光業が盛んです。

気温は黒潮が流れる太平洋に面しているため、年間平均気温は約17度と比較的温暖な気候で、真冬でも降雪はほとんどないことから比較的過ごしやすい環境にあると言えます。

今後、伊豆縦貫道路の整備が進んで行くことにより、さらに都会に近い観光都市となっていきます。

下田へのアクセス手段としては、電車と車が中心です。電車の場合は下田～熱海間を伊豆急行線・ＪＲ伊東線が結んでいます。遠方よりお越しの際には、新幹線で熱海乗り換えか、東京～下田間の直通特急電車を利用しますと約２時間30分で来ることが出来ます。車の場合は、東名高速道路から東海岸線を通る国道１３５号か伊豆半島の中心を通る国道４１４号を利用するコースがあり、現在は伊豆縦貫道の整備も進んできたことから東名沼津インターから約１時間半で来ることが出来るようになりました。

古くから東西海上交通の要衝となる重要な港であった下田港。江戸時代には風待ち港や物資の補給基地として利用され、海の関所である船改番所が設置された時代は、特に繁栄しました。１８５４年には米国ペリー提督が率いる黒船艦隊が下田港に停泊、締結された日米和親条約により下田はわが国最初の開港場となりました。その後ハリスが玉泉寺に日本初の領事館を開設しました。また、ロシアの使節プチャーチンが来航し日露和親条約が締結されるなど日本開港の表舞台として日本の歴史に名を残しています。下田の街中には当時を物語る史跡が多く残され、白と黒の格子柄が目を引くなまこ壁は、下田独特の雰囲気を醸し出しています。

自然豊かな南国情緒あふれる下田では、夏の伊豆白浜大浜海水浴場等10の海水浴場を開設している他、年間を通じてサーフィン、ダイビング、釣りなどのマリンスポーツが盛んです。また、あじさい、アロエ、水仙など四季を通じて楽しめる花や海辺や山を楽しむ遊歩道も整備されており多くの観光客でにぎわっています。

昨今では、テクノロジーの発展により遠隔地での業務が可能となったことから従来の観光関係の職に就く方のほかＩＴ関係のサラリーマンの移住も可能となり移住・定住者も年々増えてきています。

下田芸妓と 下田伝統芸能保存委員会

下田港は江戸時代より東京～大阪を結ぶ船舶の中継港として栄えてきました。その隆盛のなかで商人、役人らによる大切な席で礼儀作法を持った女衆が必要となりました。そこで当時、お稽古事を習練している町人の娘さんたちが借り出され日頃の習練の発表の場として好んでお座敷に上がったのが下田芸妓の始まりと言われています。

「下田節」「お吉踊り」が有名であり、「下田節」は約４００年前、出船入船３０００艘と言われた下田港に関わる船頭衆が全国で覚え聞いた唄を下田にあてはめて唄ったものと

言われています。船頭衆から始まりそれが町民に広まりいつしかお座敷唄として唄い踊り続けられています。

「お吉踊り」は村松春水氏の「実話唐人お吉」を基に昭和3年作家の十一谷義三郎氏が「唐人お吉」を発表、単行本として出版したことや昭和5年に劇作家真山青果氏が新橋第一劇場で上演、歌舞伎でも上演され爆発的な人気を博しました。その映画の主題歌を三味線に写し踊りがつけられ唄い踊り続けられているもので現在に至っています。下田伝統芸能保存委員会はこの伝統芸能を保存している団体です。



下田まち遺産「旧澤村邸」での三味線体験

伝統芸能を未来へつなぐ
移住・定住事業

近年の少子高齢化による担い手の不足に加え、新型コロナウイルス感染症による観光客の減少により芸妓の担い手が減少していました。他方、移住者アンケート調査を実施すると、地方の伝統芸能に興味をもっている方が多いことが判明しました。市役所とも協議をして令和5年度に「移住・定住・交流推進支援事業助成金」を活用し、下田伝統芸能の体験会を開催したいということで当助成金に応募し実施に至りました。

体験会開催に当たっては、日本舞踊や三味線を学ぶことは一般的に敷居が高く取り組みにくいといったイメージが先行しており、気軽には体験できないと思っている方も多くいるのではという推察のもと、ポリエステル製の稽古着物を用意するなど敷居を下げることを心がけました。今後の展開として有料かつ継続的に続けていける体制を模索する観点から、体験会は無料で開催し気軽に伝統芸能を体感できること、直前でのキャンセルや参加にも対応させていただくことで仕事や家庭とのバランスをとりながらお稽古ができる雰囲気をつくること、この2点を大切に実施しました。参加者からも「習い事として続けていきたい」「体験会を機会にもう一度三味線に挑戦したい」など大変うれしいお言葉をいただきました。



三味線体験の様子



東京から講師をお招きして行った踊り体験

チラシの作成、新聞や観光協会のホームページ等で広く情報発信を行った結果、参加者のうち約6割は下田市外からの参加者でした。中には静岡県外からの参加者もおり、当初の想定を大きく超える方に体験をしてもらえました。

また、後世に下田の伝統芸能を確実に継承していくためにも映像での記録を残すことが重要であると考え、映像での教材作成を行いました。

今後の展望

この体験会の参加者の中には引き続き芸を学んでいきたいという方もおり、現在も毎週土曜日、日曜日には日本舞踊、三味線教室といった形での取り組みを行っております。その中には近い将来に下田に移住をしたいと考えている方もおりますので今後の下田伝統芸能の継承者がその中から生まれてくるのではないかと期待をしています。

将来にわたり下田の伝統芸能である「下田節」「お吉踊り」等を仲間たちと守って行きたいと思っておりますので、下田にお越しの際には是非とも堪能していただければと思っています。

当たり前の日常をなくさないために備える



ゲンサイデイズ代表、
山形県自主防災アドバイザー
細谷 真紀子 氏

◉細谷 真紀子 氏プロフィール

1977年山形県生まれ。専門学校を卒業後、建築士として建築設計事務所に勤務。出産を機に退職し、東北芸術工科大学こども芸術大学（現在は「こども芸術大学認定こども園」）に母子で入学。在校中に起きた東日本大震災の被害を目にし、大人の生み出す社会課題が子どものいのちを奪わない社会を作ろうと決意し、防災を伝える活動をスタート。2016年には防災教育を行うゲンサイデイズを起業。現在は、山形市教育委員会委員や山形県自主防災アドバイザー、（一財）消防防災科学センター図上訓練指導員、避難生活支援アドバイザー（内閣府）、市民団体代表などを務める。

「地域づくりは人づくり」では、編集室が人材育成をテーマに全国のさまざまな方を取材し、その熱い思いや取り組みを紹介しています。今回は山形県内で、防災教育を行うゲンサイデイズ代表として活動されている細谷さんにお話を伺いました。

個々人の防災力の差を実感

―防災に目を向けるようになったきっかけを教えてください。

きっかけは東日本大震災で感じた個々人の防災力の差でした。山形県は大きな被害を受けませんでしたが、周囲には暮らしに困った子育て世代の家庭がたくさんありました。そんな中、介護と育児の両方を担っていた私はほとんど困ることがありませんでした。それはさまざまな情報・備えをきちんと手にしていたからです。防災を専門に学んでいない私でも備えることができたのだから、誰にでも防災力は持つことができると考えました。そして、この防災力を育んでくれたのは生まれ育った地域で出会った大人たちの姿や地域力にあると確信しました。

地域離れが進む中、未来を生きるいのちを守っていくために地域力のある大人を増やさなければならない。そう思ったことがきっかけです。

―特に減災にポイントを置く理由は。

これまでの大災害ではセーフティネットも機能せず、多くの課題・問題を生み出してきました。だからこそ「災害時は非日常となる」と多くの方が思っているかもしれませんが、私の視点は少し違います。日常の中に災害が起きることは地球で生きている以上当たり前。その中で災害に遭ってもいのちと暮らしを守り、自身の当たり前の日常を継続していかなければならないと考えています。だからこそ「いのちを守った先の笑顔のために」という視点を大切にしています。ものの言い方の違いでしょ?と思われるかもしれませんが、私はどんな時にも当たり前の日常をなくさず、災害をしなやかに受け流し、自然と共に生きる「減災」の視点を持って暮らすことが大切だと思います。

防災教育が生業になる社会を

―ゲンサイデイズを立ち上げたきっかけを教えてください。

防災教育が生業になるような社会でなければ、防災・減災は日常の当たり前にならないと感じました。変な言い方かもしれませんが「災害ボランティア＝無償奉仕」という言葉が防災教育を推進する中で大きな壁だと感じています。

防災教育を行っていることを話した時に「防災教育じゃ食べていけないでしょう」と災害ボランティアの方に心配された言葉が衝撃的でした。確かに、防災・減災を伝えたい、活動したいといっても「無料でやってくれるでしょ?」というのが東日本大震災後の現実でした。もちろん、災害ボランティアをされている方が悪いわけではありませんが、災害時にいのちを失う人、困る人が減るように、社会を変えていくためには防災教育が生

業になるくらいでなければならないと思ったのです。同時に、防災・減災が空気を吸うように当たり前のこととなって、仕事が無くなれば本望！とも思っています。

活動としては、地域や団体の要請を受けて地域防災に関する防災教育の実施や、学校教育の中で防災教育を実施しています。自助・共助・公助と手段化している防災が多い中で、それぞれを何のために行うのか、危機管理という視点を疎かにせず、地域や人々の未来の姿に目を向け、今ある防災・減災を結び付ける「ひと・もの・こと」をつなぐ存在になろうと思っています。

―幼保小中での防災教育について。

大切なのは知識・経験を実践に生かせることです。小中学校で学んだ防災の「枝葉」を育てるためには、それ以前に「根っこ」を広げる必要があると思っています。だからこそ子どもたちが保護者の手を離れるまで、幼児期からの切れ目ない防災教育を通じて、自然に防災が身近にあることが当たり前になればいいと思っています。

現在、山形県中山町内の教育（保育）機関の全学年実施に向けて段階的に学年ごとの防災教育を実施・作成しています。大切にしているのは、発達段階に合わせてそのときどきに自分事として学び、視野が広がるにしたがって取り巻く人たちの顔がしっかりと思い浮かぶことです。具体的な取り組みとしては、幼児教育では「防災＝怖いこと」ではなく、防災はいのちを守るための願いという気づきを持てることを軸としています。また保育者には環境を整える重要性を伝えています。

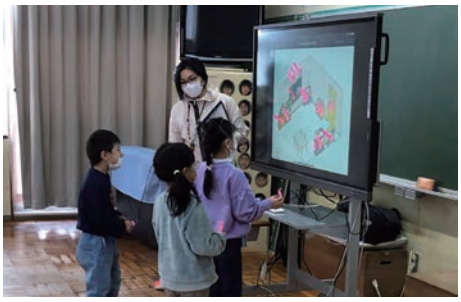
他にも小学5年生では、理科教育に添いながら、最上川によって作られてきた地域の特性を知り、まちや大切な人を守るという視点で学びを深めていきます。授業には国内に数台しかない河川モデルを防災教育の視点を盛り込み使用することで、先生方には、教科のねらいに添って「生きる力」を育む防災教育も実施できる提案をしています。

防災教育を受けた子どもたちへのアンケートでは、8割以上の子ども・保護者が「防災意識が高まった」と回答しており、中山町では流域治水・直下型地震災害へのソフト対策としての防災教育が予算化されることとなりました。

幼保小中だけでなく、女性や若者の防災教育への参画にも取り組んでいます。それをきっかけに、地域づくりに関してしなやかな視点を持っている人が地域に関われないという現状を変えていき、これまで以上に「ひと・もの・こと」を、防災を通じてつなぎ、地域でも学校でも「こころを育む減災」の必要性を伝え、自分を社会に生かそうと行動を起こす人を支援していきたいと思います。



幼稚園・保育園での防災教育



小学校１年生での防災教育



小学校５年生での防災教育

しなやかで、誰からも見える地域づくり

―最後に、細谷様にとって「地域づくり」「人づくり」とは。

私の防災力・減災力のスタートは「学び」ではなく「体験」、地域に住んでいる人たちの暮らす姿そのものがスタートとなりました。この先、地域の変化をどう受け入れ、人と地域との関わりをどう拡げ、地域と地域をどうつないでいくのか、対話と熟議が出来るしなやかな対応力を持った、誰からも見える地域づくりが大切だと思います。

そのためには、多様な人の視点や意見、参画が必要です。社会課題を取り除き、自分の取り組んでいる暮らしや仕事・趣味など、すでに当たり前の日常として取り組んでいるものに防災の視点を持ち合わせた人を増やしていく人づくりとしての防災・減災を大切にしてきたいです。

地域活性化センター副参事
●吉澤 利能（熊本県菊池市から派遣）

首長の思い
column



「来てよし、住んでよし、育ててよし！ あなたのまち・諫早!!」の実現を目指して

長崎県諫早市長　大久保　潔重

諫早市は、長崎県南部の中央に位置し、有明海、大村湾、橘湾と、特性の異なる三つの海に囲まれ、北には多良山系を望み、四季折々の豊かな自然に恵まれ、古くから農業や漁業が盛んに営まれてきました。

市の中央部を流れる本明川（ほんみょうがわ）は、市街地を通って有明海に注ぎ、下流の諫早平野は県下最大の穀倉地を形成し、肥沃な丘陵地帯は、じゃがいも、にんじん、たまねぎなどの野菜やミカンの特産地となっております。海産物については、カキやナマコに加え、近年はヒオウギ貝の産地化も目指しております。

また、県都長崎市、長崎空港がある大村市、自然豊かな島原半島と隣接し、それぞれの場所に短時間で行くことができる交通の要衝でもあり、その利便性から半導体や航空・宇宙関連などの先端技術を要する製造業を中心に産業の集積地として発展を続けております。

令和4年9月には西九州新幹線が開業し、駅ビルやバスターミナル整備により交通環境が整った諫早駅周辺については、その効果として、複数のマンションなどの住宅供給が進んでいる状況にあり、今後も、居住人口が増加することで、まちのにぎわい創出につながるものと期待しているところです。

このほか、多くのスポーツ施設を擁する本市において、元体操競技選手の内村航平さんなど多くのトップアスリートを輩出してきた「スポーツのまち」としてだけでなく、昨年は、カンヌ国際映画祭で最優秀男優賞を受賞された役所広司さんや、小説「極楽征夷大将軍」で直木賞を受賞された垣根涼介さんが生まれ育った「文化のまち」として諫早の魅力を全国へ発信できる機会となりました。

少子高齢化や人口減少の進行により、地域の活力が低下するなど、全国的にさまざまな課題が生じておりますが、私は、この諫早市を「人口が安定化し、市民の所得が増加し、皆様が力強く生き生きと躍動するダイナミックな街にしたい！」と思っております。

そのため、本市の持つ地域資源を最大限に生かしながら、さまざまな施策について、総合的かつ積極的に取り組みを進めてきました。

具体的には、雇用創出、若者の定住化、産業振興につなげるため、企業誘致を促進しており、令和3年6月から分譲を開始した市内六つ目の産業（工業）団地となる南諫早産業団地にも大手企業や老舗企業の立地が決定し、ほぼ完売しました。

また、長野地区において九州最大規模の大型商業施設進出の準備が整うなど、さらなる雇用の場の創出に向けた第一歩を踏み出したところであります。

このような近年の状況を定住人口拡大の好機と捉え、需要に応じた住宅供給ができる環境を早急に整えるため、本市の将来にふさわしい「新しい土地利用政策」について検討を進めております。

さらに、安心して子どもを産み、育てる環境の整備を推進するため、「子育て支援の3本の矢」として、令和4年度には小・中学生に係る福祉医療費の現物給付化、令和5年度には同時在園の第2子に係る保育料無償化を実施してきました。

令和6年度からは、物価高騰により家計への負担が増加する中、国による制度化を待つことなく、市立小・中学生に係る給食費の完全無償化を実施し、一層の子育て環境の充実を図ることとしております。

今後は、新たな産業団地の整備に着手し、「産業の活性化と雇用の創出」を図るとともに、市政の重要な柱である「子育て支援の充実」をはじめ、交通の要衝としての強みを生かし、「交流人口の拡大」「快適で安全な住環境の整備」などを推進し、郷土の近未来像、「来てよし、住んでよし、育ててよし！　あなたのまち・諫早!!」の実現のため、力強く市政を推進していきたいと考えております。

手前みそですが…

滋賀県

彦根市 303



■ひこにゃんとわるにゃんこ将軍
ひこにゃんと、そのライバルキャラクターとして登場したわるにゃんこ将軍

彦根市は琵琶湖の東側に位置し、江戸時代に彦根藩井伊家35万石の城下町として本格的な歩みを始め、発展してきました。

平成18年には「国宝・彦根城築城400年祭」の公式キャラクターとして「ひこにゃん」（現彦根市公式キャラクター）が誕生し、令和6年4月で18回目の誕生日を迎えました。現在も毎年1万通以上の年賀状をいただくなど、多くの皆様に愛されています。

本市では、ひこにゃんの存在を、他市にはない本市独自の強みと考えており、和田市長の就任を契機として、ひこにゃんの利活用の拡大に取り組んできました。

令和4年10月からひこにゃん商標使用の無償化実験を開始し、さらに、令和5年度からは民間事業者とのコラボレーションによるひこにゃんの新イラストやコラボ商品の作成、ひこにゃんが登場できるイベントの拡大などに取り組んでいます。また、新たにひこにゃんのライバルキャラクターである「わるにゃんこ将軍」も誕生し、彦根のさらなる盛り上げに貢献しています。



©彦根市

■ひこにゃんイラスト①
当初は左側の３ポーズのみ使用可能でしたが、平成 29 年３月に右端の「バンザイ」のポーズが加わりました



©彦根市

■ひこにゃんイラスト②
和田市長就任後、原作者のもへろん氏と協力体制を構築し、令和３年度に作成した新たなイラスト





© HIKONE/ytv

■「鳥人間コンテスト」コラボイラストとコンテストのロゴ
毎年夏に彦根市内で開催される「鳥人間コンテスト」とコラボした新イラスト（令和５年度作成）



©彦根市 × もへろん

■「近江ちゃんぽん亭」コラボイラスト
彦根市が創業の地である「近江ちゃんぽん亭」（ドリームフーズ㈱）とコラボした新イラスト（令和５年度作成）



© MOHERON STUDIO

■わるにゃんこ将軍イラスト
ひこにゃんのライバルキャラクターとして登場した「わるにゃんこ将軍」は、三セクの㈱四番町スクエアで運用



■トヨタレンタリース滋賀とコラボしたラッピングカー
カーシェアリング用のラッピングカーで、市役所駐車場にあるステーションに配置されています

地域づくり５月号

2024 年５月１日発行　編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター
東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル 13 階 電話03-5202-6131(代)
https://www.jcrd.jp/　印刷・製本／株式会社太平印刷社

法律で許可された場合以外に本誌からの無断転載を禁止します
落丁・乱丁はお取り替えします。編集室（03-5202-6139）E-mail：hensyuu6139@jcrd.jp まで、ご連絡下さい。

地域活性化センターからのメールマガジン登録はこちら

地域づくり5月号（通巻419号）　令和6年5月1日　一般財団法人　地域活性化センター発行



一輪車



宝くじ桜



子宮がん検診車

宝くじは、みんなの暮らしに役立っています。



救急普及啓発広報車



宝くじドリームジャンボ絵本



集会用テント



「健康手帳」（冊子）



ベンチ



リスザル展示施設

宝くじは、少子高齢化対策、災害対策、公園整備、
教育及び社会福祉施設の建設改修などに使われています。

あなたに夢を。街に元気を。
クーちゃん　宝くじ

一般財団法人日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や
公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。

一般財団法人
日本宝くじ協会
https://jla-takarakuji.or.jp/

2024
5
ISSN 1340-8917



第28回 ふるさとイベント大賞

地域づくり 特集編

目 次　表紙裏　第28回ふるさとイベント大賞表彰式・2024地方創生フォーラム in 東京を開催

大賞（内閣総理大臣賞）　うみぞら映画祭 in 淡路島【兵庫県洲本市】… 2

最優秀賞（総務大臣表彰）　加子母木匠塾2022【岐阜県中津川市】… 4

優秀賞
天童冬の陣 令和鍋合戦【山形県天童市】… 6
播州織産地博覧会【兵庫県西脇市】… 8
四万十川の春を彩る 元祖「こいのぼりの川渡し」【高知県四万十町】… 10

ふるさとキラリ賞
勝浦さくら祭り【徳島県勝浦町】… 12
しまめぐり双六 IN 高島【長崎県長崎市】… 14

次点〈17団体〉
しばれフェスティバル【北海道陸別町】…… 16
第15回 鬼小十郎まつり【宮城県白石市】…… 18
福島わらじまつり【福島県福島市】…… 20
SUN-IN未来ウオーク【鳥取県倉吉市ほか】…… 22
勝山左義長まつり【福井県勝山市】…… 24
第28回信州爆水RUN in 依田川【長野県上田市】…… 26
秩父宮記念富士登山駅伝競走大会【静岡県御殿場市】…… 28
NIGHT WAVE ～光の波プロジェクト in ZUSHI～【神奈川県逗子市】…30
音戸清盛祭【広島県呉市】…… 32
あっさぶふるさと夏まつり【北海道厚沢部町】…… 17
真夏のとうもろこし巨大迷路 ゴールドデント777WAKUYA2022【宮城県涌谷町】… 19
JAPAN WORLD FILM FESTIVAL2022 in 常陸大宮【茨城県常陸大宮市】…. 21
千年未来工藝祭【福井県越前市】…… 23
オペラ「御柱」【長野県岡谷市】…… 25
駅とまちを光でつなぐ杜のイルミネーション【岐阜県岐阜市】…… 27
青野原俘虜収容所レミニセンス【兵庫県加西市】…… 29
美作三湯芸術温度2022【岡山県】…… 31

都道府県漫遊（香川県）

2024年5月1日発行　編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター ©2019 jcrd.jp
東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131（代）https://www.jcrd.jp/　印刷・製本／株式会社太平印刷社

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです

第28回ふるさとイベント大賞表彰式・2024地方創生フォーラム in 東京を開催

地域活性化センターでは、2024年2月22日（木）にルポール麹町で「第28回ふるさとイベント大賞表彰式」と「2024地方創生フォーラムin東京」を開催しました。当日は表彰式の様子や講師の講演などをユーチューブで同時配信し、多くの方にご視聴いただきました。

■プログラム

13：00～　第28回ふるさとイベント大賞表彰式
14：30～　2024地方創生フォーラムin東京

【テーマ】「AI × 地方創生」
【基調講演①】村井 宗明 氏（東武トップツアーズ株式会社 CDO）
【基調講演②】鈴木 祥太 氏（ソフトバンク株式会社 Axross事業課）



表彰式の記念写真



地方創生フォーラム in 東京の様子



大賞を受賞した「うみぞら映画祭 in 淡路島」の関係者のみなさん

第28回ふるさとイベント大賞の概要

「ふるさとイベント大賞」は、全国各地で数多く開催されている地域の活力を生み出すイベントを表彰し、全国に向けて紹介することによって、ふるさとイベントのさらなる発展を応援することを目的に設けられた賞です。

今回で28回目を迎え、第27回までに、204の個性豊かなイベントを表彰しています。

今後も、ふるさとイベントの創造・発展を促すことで、地域固有の風土・伝統・暮らしを守るとともに、地域に対する愛着と誇りを育み、内外との交流につながる地域の活性化を目指しています。

●応募対象イベント

2022年7月1日から2023年6月30日までに開催されたイベント。

※現在の状況を考慮し、オンライン開催も対象。また、規模の縮小や内容の変更などがある場合でも、イベントを継続することで、そのイベントが本来持つ意味を伝えようと創意工夫を凝らしているものも含む。

以下のいずれかに該当するイベントは対象外。

①直近の5回（第23回～第27回）に大賞、最優秀賞等各賞を受賞したイベント

②継続性がなく1回の開催のみで終了するイベント

●選考過程

イベント主催団体から、市区町村等を通じ、都道府県へ応募書類を提出していただきました。今回の応募総数は92件でした。

応募されたイベントについては、イベントプロデューサーや学識経験者等により構成された「第28回ふるさとイベント大賞選考委員会」において、厳正な審査を行い、受賞イベントを決定しました。

なお、選考にあたり、右記の選考基準を基にイベント内容を総合的に判断しました。

●選考基準

	評価のポイント
企画	・地域資源を積極的に活用している。 （地域資源：風土、産業、食文化、伝統文化、歴史、特産物、建築物・構造物など） ・独創性にあふれ、新たな地域の魅力を創り出している。 ・多くの人を引き付ける魅力がある。 ・魅力を増すための創意工夫が顕著である。
運営	・地域住民が積極的に参加している（参加することに誇りを持っている）。 ・地域の内外を問わず、交流や連携が行われている。 ・継続して開催されており（継続される見込みがあり）、将来の発展性が見られる。
効果	・地場産業の振興や観光客誘致など、経済的な波及効果がある。 （低予算でも波及効果が大きいなど） ・地域の知名度アップに貢献している。 ・地域住民の郷土意識の高揚につながっている。 ・伝統文化の継承や新しい文化の創造につながっている。

選考委員長の総評　北川 フラム氏（株式会社アートフロントギャラリー代表取締役／アートディレクター）



ふるさとイベント大賞は第28回を迎え、ますますその存在感を人々に伝えていると思います。その土地のなりたち、歴史、生活、産業、祭など、それぞれの土地に固有の特徴を生かしたイベントは、土地に根ざした古くから続いた共同体の強さだけでなく、新しいネットワークの可能性を見せてくれています。

1月1日に起きた能登半島地震は今なお厳しい状態が続いており、地域の皆さんの苦境を思えば言葉もありません。しかしそのなかでの共同体の強さを私たちは映像や報道で知ることができました。第19回の最優秀賞を受賞した珠洲市においても、それらのイベントを通してその地に行かれた人たちにとっては人ごとではなく、手伝い、寄金、励ましは素晴らしいものがありました。

災害はどこかで起きます。ここでの心の寄せ方はひとつの希望でした。ふるさとイベント大賞はその地の人たちのものだけではなく、他の地の人々が心を寄せるものになっているのだと思います。

問い合わせ先

一般財団法人 地域活性化センター
地域創生・情報広報グループ地域創生課

〒103-0027 東京都中央区 日本橋 2-3-4
日本橋プラザビル13階

TEL 03-5202-6136　FAX 03-5202-0755
E-mail：event@jcrd.jp　HP：https://www.jcrd.jp/



大賞　内閣総理大臣賞

うみぞら映画祭 in 淡路島

2023年5月27日・28日

【開催場所】兵庫県洲本市・大浜公園



評価のポイント

●海辺の屋外シアターのアイデアが特徴的。主体的な住民参加が随所に見られる。鑑賞だけの目的にとどまらないすそ野の広がりを感じる。
●「海」という昔からの地域資源を令和の時代にアップデートした好例。清掃活動、放置竹林などSDGsへの目配りをきかせた企画である。
●若い女性層の参加者が多いというデータは、特筆すべき成果だと感じる。地域イベントが次世代に向けつながっていく将来性は高く評価できる。

2024年開催日程

■開 催 日：2024年4月27日・28日・29日
■開催場所：兵庫県洲本市・大浜公園
■問い合わせ先
・団 体 名　海の映画館をつくろうプロジェクト実行委員会
・住　　所　〒656-0017　兵庫県洲本市上内膳304-1
・電話番号　0799-20-6212　・URL　https://umizora-cinema.com

大賞

第28回
ふるさとイベント大賞

内閣総理大臣賞

うみぞら映画祭 in 淡路島

「うみぞら映画祭」は、淡路島の海の上に440インチの巨大なスクリーンをクレーン２台でつり下げ「海の映画館」をつくり、波音を聞きながら砂浜から映画を楽しむ野外上映イベントです。映画祭期間中は、「海の映画館」の他にも、花火やナイトマーケット、SUPなどのマリンアクティビティ、テントサウナ&ドラム缶風呂体験、乗馬体験、地元企業のワークショップなど一日中海辺で楽しめるイベントとなっています。

2023年5月開催時の来場者数は２日間で約7,000人。来場者の多くは女性で男女比は女性66%、男性34%。また、20~24歳までの女性が多く、イベント後にSNSで写真や動画が広く発信されました。また、日本財団「海と日本プロジェクト・CHANGE FOR THE BLUE」プロジェクトとも連携し、来場者の方全員にごみ拾いをしていただき、海洋ごみ問題の啓もうにつながるムービーも上映するなど、海を守る取り組みも継続して実施しています。

2022年までは実行委員会主体で行う内容が多かったのですが、2023年からは淡路島のいろんな施設や飲食店、学校と一緒になってイベントを行うカタチにしました。たとえば、SUPやBBQエリア、テントサウナ&ドラム缶体験、乗馬体験などは普段からマリンアクティビティやアウトドア体験施設を運営している施設やチームにお任せしたり、タイルの絵付けワークショップは淡路島の伝統的なタイルメーカーさんに実施していただいたりしました。地元の高校生もボランティア活動に積極的に参加していただきました。淡路島は放置竹林の問題も深刻なので、放置竹林を使ったワークショップなども実施。今後継続的に行っていきたいと思っています。

主催者メッセージ



海の映画館をつくろうプロジェクト実行委員会／
株式会社海空
イベントプロデューサー
大継 康高さん

「うみぞら映画祭」は、白砂青松の風光明媚（めいび）な海水浴場である洲本市の大浜公園で毎年行っている野外上映イベントです。多くの人に美しい大浜公園で波音を聞きながらのんびりとした時間を過ごしてほしいという思いからスタートしました。星空のもと波音を聞きながら砂浜で観る映画は格別です。また、映画祭のメインビジュアルにもなっている「海の映画館」と水上花火のコラボ演出も必見です。









開催DATA

自治体名	兵庫県洲本市
自治体人口	41,340人 ※2023年11月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	海の映画館をつくろうプロジェクト実行委員会
開催回数	7回
開催日	2023年5月27日・28日
開催場所	兵庫県洲本市・大浜公園
観客数	約7,000人（2日間）



評価のポイント

●自然環境保護や貴重な資源活用の地域産業とも結びつく大きな「なりわい」の一貫した学習体験が魅力。学生を中心とした外来参加者と受け入れの地域住民側との相互の協力によるところが好印象。
●小学校の野外ステージ、公園の東屋の建設や、中学校の図書館、宿泊所の改修など、学生たちが制作した成果物がそのまま残り地区で活用されている。
●この地で新鮮な学びを得た若者たちが全国の地域づくりの現場で活躍されていることを想像すると、地域文化の存続に大きく貢献していると感じる。

次回開催日程

■開 催 日：2024年8月
■開催場所：中津川市加子母地内
■問い合わせ先
・団 体 名　加子母むらづくり協議会（事務局:NPO法人かしもむら）
・住　　所　〒508-0421 岐阜県中津川市加子母3519番地2
・電話番号　0573-79-3669　・URL　https://www.kashimokusho.com/

最優秀賞

第28回
ふるさとイベント大賞

総務大臣表彰

加子母木匠塾（かしももくしょうじゅく）2022









加子母木匠塾は、伊勢神宮式年遷宮御用材である木曽ヒノキを産出する中津川市加子母で、1995年に大学教授の先生方が中心となり、地元の林業・木材関係者の協力のもと合同ゼミ形式の木造建築セミナーとして始まりました。現在では京都大学、京都工芸繊維大学、京都芸術大学、東洋大学、立命館大学、金沢工業大学、名城大学、滋賀県立大学の８大学から毎年300名もの大学生が集結し、地域全体をフィールドとして、木造建築実習を中心に、山村文化の継承、自然環境の保護、森林空間の整備や地域材利用の推進に取り組んでいます。

活動のメインは夏に行う木造建築実習ですが､その年の実習が終わると、翌年度に向けて各大学内に、幹事・棟梁・設計・生活・広報・催事のリーダー、そして全大学を総括する総幹事、副総幹事が選出され、学生が主体となり準備が始まります。地域の要望に基づき製作課題が決まり、要望の聞き取りと指導工務店との打合せを重ねながら製作プランを決めていきます。限られた予算のなかで、いかに要望に応えることができるか、設計・施工担当者が中心となり、毎月の現地で行う打合せを重ねながら具体化していきます。ただ単に木造建築物を作るだけでなく、地域交流イベントなどの企画や地域の伝統行事などにも積極的に参加し、学生が地域と交流することで、地域コミュニティの中に溶け込みながら机上では学べないものを感じ取れるきっかけとなっています。

加子母木匠塾は今年で30周年を迎えます。少子高齢化等により農山村のコミュニティが衰退しつつある状況ですが、これからの日本を担う若者たちが、山村地域での体験や交流を楽しむとともに、地域づくりのサポートを行う外部人材でもあるという二つの要素を兼ね備えた存在となっており、木造建築を学ぶという木匠塾の本来の目的以上の価値が学生と地域の双方に生まれ無限の可能性を秘めたイベントになっています。

主催者メッセージ



加子母木匠塾
2021・2022学生総幹事
山本 明斗さん

私たちの製作した作品群はもちろんですが、1894（明治27）年に創建され築130年を迎える芝居小屋「かしも明治座」がおすすめです。2015（平成27）年には樽葺（くれぶ）き屋根に復元され、予約すれば、普段は見ることができない舞台裏や楽屋、廻り舞台、奈落なども見学できます。また、毎年秋には地元役者による加子母歌舞伎公演が行われており、私も役者として出演させていただきました。

開催DATA

自治体名	岐阜県中津川市
自治体人口	75,391人 ※2022年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	加子母むらづくり協議会
開催回数	28回（2022年時点）
開催日	2022年8月8日~26日 （合宿実施期間）
開催場所	中津川市加子母地内
観客数	約1,500人（うち学生は約300人）



評価のポイント

●子どもたちに体験的な食育を通して地域の食文化を伝える試みやイベントを支える立場での参加機会がある。これらが自然な形でのイベントの継承・継続につながっている。
●地域に新たなにぎわいをもたらしている。ともすれば、よくある「食のイベント」に見えてしまうが、今後も「地域性」を生かし、天童ならではのイベントとして成長していくことを願う。
●県内の大学生やボーイスカウトも運営ボランティアとして参画しており、地域に根差したイベントになっている。

次回開催日程

■開 催 日：令和6年11月中旬～12月上旬（予定）
■開催場所：未定
■問い合わせ先
・団 体 名　天童商工会議所
・住　　所　〒990-0013　山形県天童市老野森1-3-28
・電話番号　023-654-3511　・URL　https://nabegassen.net/

優秀賞

第28回
ふるさとイベント大賞

地域活性化センター会長表彰

天童冬の陣
令和鍋合戦

武器を使わずに戦う、味で勝負の平和な合戦。

「鍋合戦」は平成８年から天童市の「初市」の活性化を目的にスタートしたイベントで、規模や出店数の拡大などにより、今では天童市内の交流人口を増やし、地域経済の活性化を目的とした天童市・山形県を代表する冬の風物詩・食の一大イベントとなっております。

山形県内はもとより、全国や東北各地の自慢の鍋料理が集結し、味を競います。来場者はお好きな鍋を３杯たべるごとに、天童名産の将棋駒を受け取ることができ、気に入った鍋へ投票を行います。集計後、上位５団体を選出し、審査員による実食審査で最終の順位を決定します。選ばれた１位の鍋を「鍋将軍」、２位を「鍋の局（つぼね）」と設定し、賞状と、天童市の名産である「置き駒」にそれぞれの名称を記載した記念品を授与しております。

またステージイベントも開催しており、ダンスの披露やゲストによるパフォーマンス、トークショーを行い、イベントをさらに盛り上げております。

第26回開催時は、新型コロナウイルスの影響によりイベント自体は中止となりましたが、代替イベントとして市内の飲食店を舞台に独自の鍋を提供していただく「スタンプラリー型」で実施しました。市内の飲食店をまわり、鍋を食し、スタンプを押印の上、投票すると抽選で豪華景品が当たるイベントとして開催しました。

第28回から通常の会場イベントも復活し、スタンプラリー型とのハイブリッド開催でイベント自体もパワーアップしました。令和６年度はスタンプラリー型を「令和鍋めぐり」と名称を替え、より皆様に親しんでもらえるイベントを目指しております。

鍋めぐりでも投票と審査員による審査を行っており、飲食店をお城と見たてて、１位の鍋を「鍋ノ大天守」、２位を「鍋本丸」として賞状と記念品の授与を行っております。

次回30回を迎える「天童冬の陣　令和鍋合戦」、ぜひ皆様のご来場をお待ちしております。

主催者メッセージ



天童商工会議所青年部
令和鍋合戦公式キャラクター
なべ丸くん

天童冬の陣 令和鍋合戦は武器を使わず、味で勝負の平和な戦いじゃ！

「鍋将軍」の座を目指し、各地からオリジナルのアツアツ鍋が一堂に会する、山形県天童市の冬の食の一大イベントである。

ぜひ、皆の投票で戦いを盛り上げるのじゃ！ わしも鍋奉行も待っておるぞ！







開催DATA

自治体名	山形県天童市
自治体人口	61,052人 ※令和4年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	天童商工会議所青年部
開催回数	29回
開催日	令和5年11月19日
開催場所	山形県総合運動公園中央広場
観客数	約12,000人









評価のポイント

●地産地消は素材の魅力やモノづくりの過程を身近なものにし、暮らしに欠かせない体験を醸成する上で大切なことだと、あらためてこのイベントを通じて感じた。
●多様な世代の人々、地元と他地域が一緒になって企画を工夫する循環が生まれ、今後の発展の可能性を感じられる手作り感いっぱいのイベントである。
●地元の人たちが楽しみながらあの手この手で企画を育てる「熱意」が伝わってくる。移住者や住民の活躍もあり、まさにシビックプライドを取り戻す強力なエンジンになっている。

次回開催日程

■開 催 日：令和6年5月26日
■開催場所：西脇市役所～旧来住家住宅（まちなかエリア）
■問い合わせ先
・団 体 名　播州織産地博覧会実行委員会（事務局：西脇商工会議所）
・住　　所　〒677-0015　兵庫県西脇市西脇990
・電話番号　0795-22-3901　・URL　https://ban-paku.com/

優秀賞

第28回
ふるさとイベント大賞

地域活性化センター会長表彰

播州織産地博覧会

播州織産地博覧会「播博（ばんぱく）」は、西脇市役所のまちなか（中心市街地）エリアへの移転を契機とした中心市街地の活性化を考える「まちなか未来ワークショップ」で地元有志から発せられた「織物のまちに、織物の名物市を！」という思いが形となって、平成30年にスタートした播州織の生地マルシェを中心としたイベントです。

播博会場となるまちなかは、かつては北播磨地域有数の繁華街で、商業施設や飲食店が立ち並ぶアーケード街でしたが、鉄道路線の廃止や大型商業施設の立地、人口減少の影響などでシャッター街となり、空き家や空き店舗が増加していることが課題でした。

また、西脇市の基幹産業である「播州織」は、江戸時代からの家内制工業から明治期に工業生産へと移行し、戦後大きく発展しましたが、円高の進行や新興国の台頭に伴って競争力が失われ、生産数量は最盛期の30分の１にまで減少しています。また、アパレルなどに生地を提供する素材産業であったため、知名度・ブランド力が低いことも課題でした。

こうした中、「まちなかの空き店舗や空き地を活用してにぎわいを創出するイベントができないだろうか」という思いと、「播州織の産地なのに生地を購入できる場所が少ない」「播州織をもっと多くの人に知ってほしい」という課題意識が重なり、播州織関係者や地域住民がサポートする形で、まちなかの空き店舗や空き地を活用した生地マルシェが誕生しました。

平成30年の第１回には予想の10倍近い5,000人の来場があり、新型コロナウイルス感染症による２度の開催中止を経て、４回目となる令和５年は、全国各地から約8,500人が訪れる魅力あるイベントに成長しました。また４回目には初となる播州織オープンファクトリーも同時開催し、「播州織の産地を訪れてもらったのだから、ものづくりの現場もぜひ見てほしい！」という当初の思いも実現できました。

今では、イベントを契機に、まちなかエリア、空き店舗の再評価につながり、会場エリアの空き店舗をリノベーションしたショップが複数オープン。目に見える形でまちなかの活性化につながっています。

主催者メッセージ



マルシェ会場となるのは、播州織全盛期の面影を残す“まちなか”。昭和レトロな建物や喫茶店などまちの歴史が感じられるのも「播博」の魅力の一つです。ぜひ、会場にお越しいただき、風情あふれるまちなみと色柄豊かな播州織をお楽しみください。

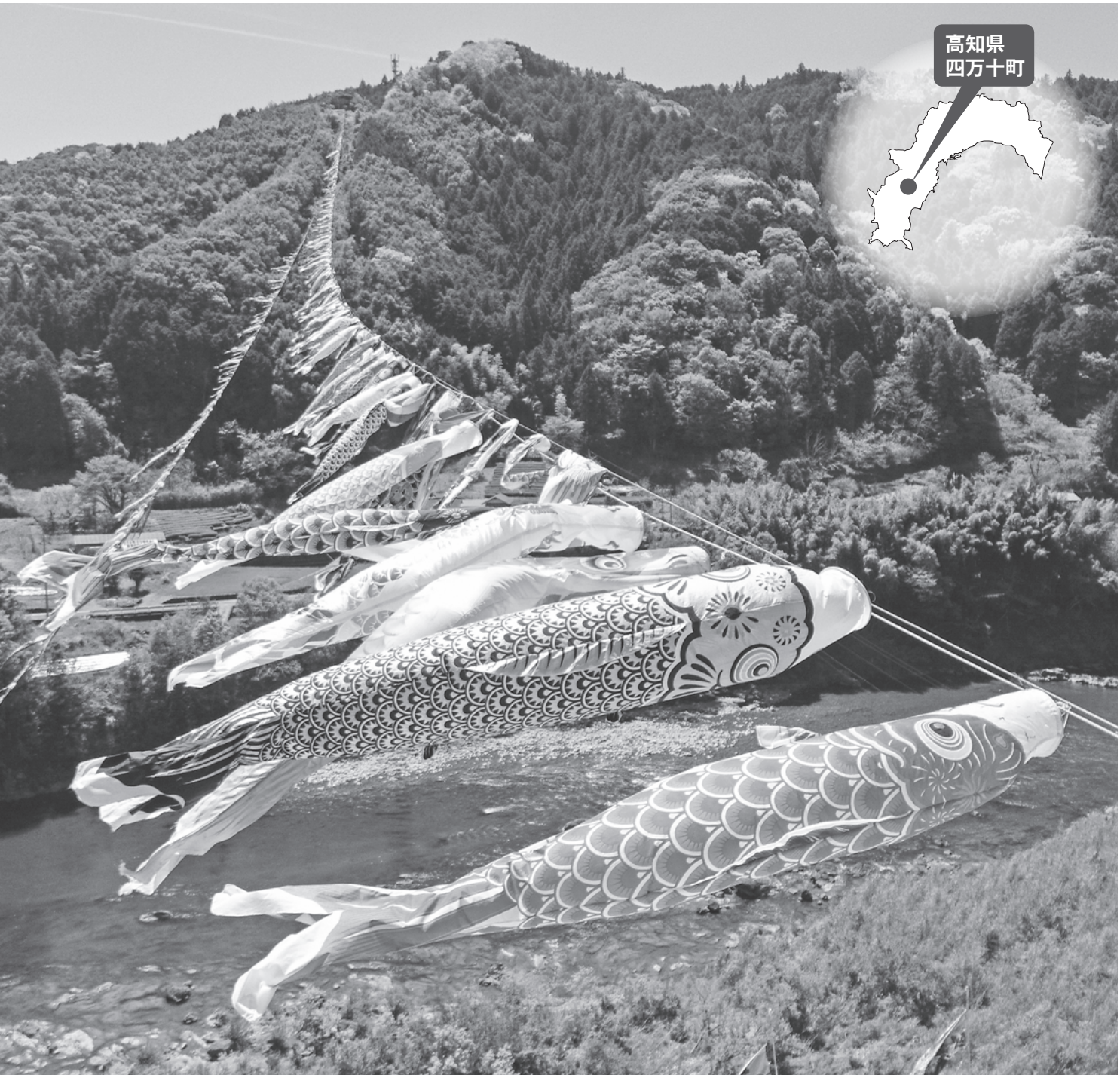
播州織産地博覧会実行委員会代表
（秋田商店／布工房 風花～ kazahana ～）

秋田 恵さん



開催DATA

自治体名	兵庫県西脇市
自治体人口	38,185人 ※令和5年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	播州織産地博覧会実行委員会 （事務局：西脇商工会議所）
開催回数	4回（新型コロナにより2回中止）
開催日	令和5年6月4日
開催場所	西脇市役所～旧来住家住宅 （まちなかエリア）
観客数	約8,500人



評価のポイント

●広がりのある河川敷を利用し、地域の子どもたちに向けて夢や感動を届ける大胆で素朴な思いが半世紀にわたり受け継がれていることに感銘を受ける。
●こいのぼりがずらりと並ぶ様子は壮観。家庭で不要になったこいのぼりをあげるところからはじまったという点が今の時代にとても合っていると感じる。
●「こいのぼりを四万十川にかける」というシンプルかつ視覚効果の強いアイデア。地元の方々により、約半世紀にもわたって取り組まれ続けた持続性に感動した。

令和6年開催日程

■開 催 日：令和6年4月13日～令和6年5月12日
■開催場所：こいのぼり公園（四万十町十川）
■問い合わせ先
・団 体 名　四万十町十和地域振興局地域振興課
・住　　所　〒786-0504 高知県高岡郡四万十町十川145-3
・電話番号　0880-28-5111　・URL　https://www.town.shimanto.lg.jp/

優秀賞

第28回
ふるさとイベント大賞

地域活性化センター会長表彰

四万十川の春を彩る 元祖「こいのぼりの川渡し」

このイベントは、中山間地域もたくさんの子どもたちでにぎわっていた昭和49年、当時の旧十和村（とおわそん）の若者たちが、各家庭であげなくなったこいのぼりを四万十川にまとめてあげることで、子どもたちの健やかな成長と将来の躍進を願い、始まったものです。

現在では類似イベントが全国で多く見られますが、当時は他に類を見ない、さらには日本最後の清流と言われる四万十川をこいのぼりが横断するイベントということでさまざまなメディアにも取り上げられるようになってきました。

平成９年には旧十和村に赴任していた国際交流員の発案により、米国の子どもたちにもこいのぼりを見せたいという思いからナイアガラでこいのぼりの川渡しを実施しました。作業は難航しましたが、地元警察を筆頭に多くの現地住民の力を借りて、約200匹のこいのぼりがナイアガラの上空を彩りました。

回を重ねるにつれて、全国から使われなくなったこいのぼりが送られてくるようになり、同時に規模を拡大し、今では四万十川を横断する元祖「こいのぼりの川渡し」を一目見ようと全国から多くの観光客が訪れるイベントへと発展していきました。また、このイベントは、住民ボランティアや地元企業の支援により成り立っており、地域住民の郷土意識の高揚にもつながっています。

新型コロナウイルス感染症の位置づけが変更になって最初のゴールデンウィークを迎えることになった令和５年は、こいのぼりの川渡しに併せて毎年実施しているイベント「よってこい四万十」の充実や、新たにツアー企画も実施し、期間中は多くの観光客でにぎわいをみせました。

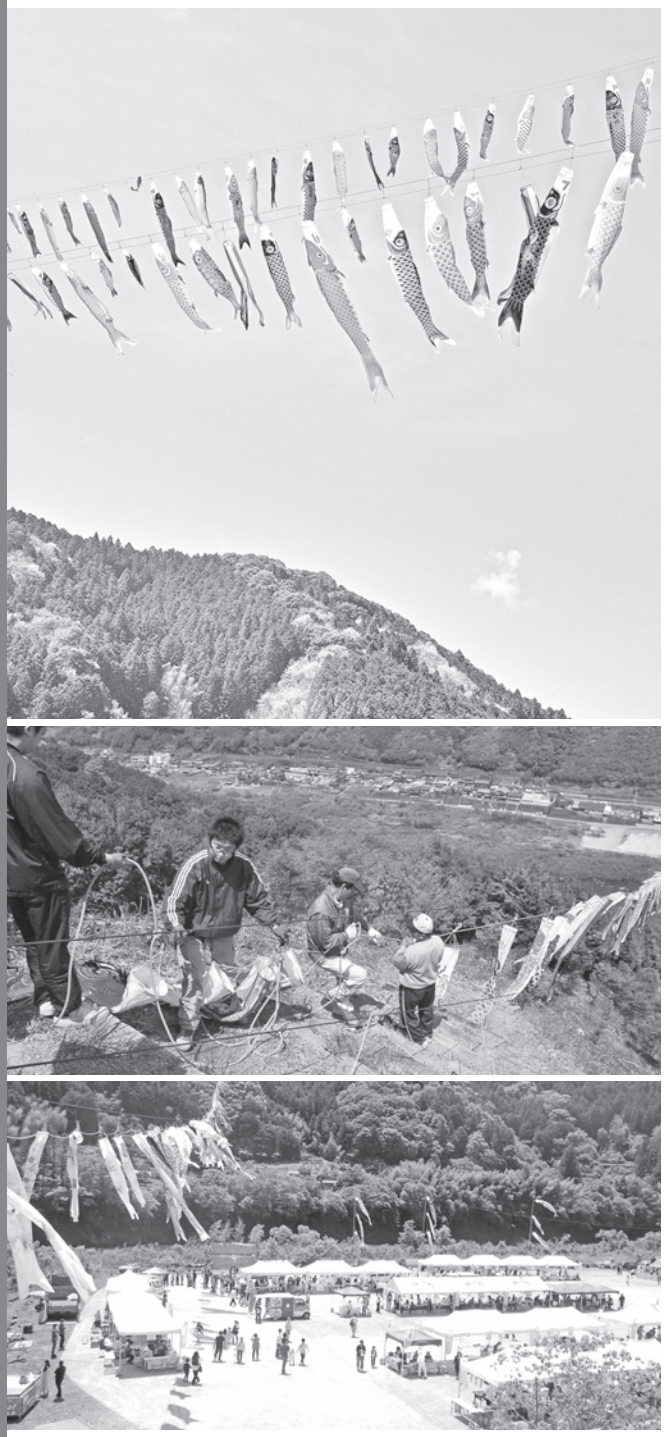
また、50回の節目を迎える令和６年に向け、町の支援を受けて川渡しに必要な設備の大規模改修を行いました。全国の皆さん、ぜひ四万十町にお越しください。

主催者メッセージ



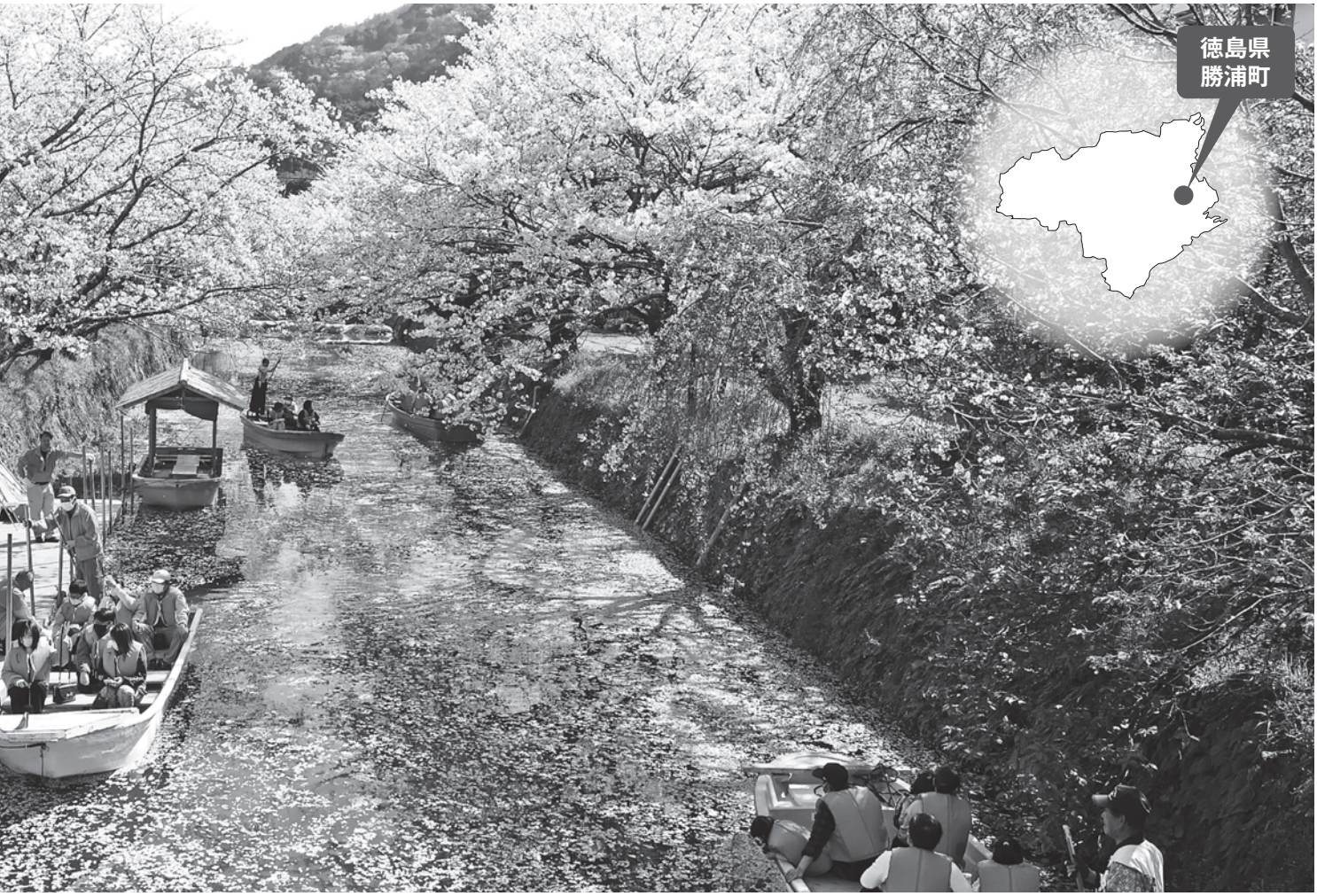
十川（とおかわ）体育会会長
宮田 光さん

このイベントの最大の見所は、山々が新緑に染まる4月中旬から5月中旬にかけ、約500匹のこいのぼりが四万十川上空を優雅に泳ぐ姿を一望できることです。また、こいのぼり公園対岸の山の中腹にある展望台からは四万十川とこいのぼりの川渡しを見下ろすことができ、その姿は四万十川をたくさんのこいが泳いでいるようにも見えます。



開催DATA

自治体名	高知県四万十町
自治体人口	15,397人 ※令和5年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	主催団体　十川体育会
開催回数	49回
開催日	令和5年4月15日～ 令和5年5月14日
開催場所	こいのぼり公園（四万十町十川）
観客数	約33,000人







評価のポイント

●河川沿いへの地元住民の方々の桜の植樹を受けて、一年に一度、その歴史に目を向け多くの参加者と共有できる家族の輪をつなぐような企画が好印象。
●日の暮れるアフター 5の時間帯に華やかな光の趣向が添えられることで、多くの人々と過ごせる時間が大切にされていると感じる。
●桜といえば日本全国にある「ありがちな資産」であるが、予算をかけずに創意工夫を凝らし、キラリと光る活用ができている。

2025年開催日程

■開 催 日：2025年3月25日～4月10日（予定）
■開催場所：「生名ロマン街道」周辺
■問い合わせ先
・団 体 名　生名ロマンの会
・住　　所　〒771-4303 徳島県勝浦町生名字山ノ神39-1 戸川幹雄方
・電話番号　090-8970-6728　・URL　https://awa-sakura.jp

ふるさとキラリ賞

第28回
ふるさとイベント大賞

選考委員会表彰

勝浦さくら祭り

1975年の河川改修工事完成を機に、地元住民が川の両岸に植えた桜の苗木450本が、年月を経て延長１㌔の見事な桜並木となりました。過疎高齢化が進むなかで、先人の精神を継承し、地域の宝を守りながら、住民の絆を強め活性化につなげたいとの思いで、2003年に「生名ロマンの会」を結成し、翌年から「勝浦さくら祭り」を開始。「見る桜」から「体験できる桜祭り」へと進化してきました。

徳島県内を代表する桜並木に加え、未来を担う「子供たちの学び、成長、夢」を主題に、川沿いの立地環境を生かして家族で楽しめるイベントとしています。今回は、川に浮かべた梶取船からのお花見、アメゴ（アマゴ）の釣り堀、トロッコ列車、LED電灯によるライトアップ、宝探し、ステージイベントなどを行い、徳島県ゆかりの写真家、大杉隼平氏が勝浦町内で撮った写真を川に展示しました。

２週間余りの期間中、例年の約３万人（2016年頃は約１万人）を上回る約５万人（町人口の約10倍）を集客し、地場産品等の売店や近隣のJA産直市、道の駅等の売上げ増にも貢献しました。また、近隣でほぼ同時期に開催される「阿波勝浦ビッグひな祭り」とも連携し、2018年には台湾からのクルーズ船客１便約2000人、2023年にも台湾からの航空チャーター便客６便計178人が来場するなど、夢や誇りの持てる地域づくり、勝浦ファンの増や町のイメージアップに大いに寄与しています。

「生名ロマンの会」は、現在、生名地区住民を中心に約90人が会員（ボランティア）で、町内の道の駅や総合型地域スポーツクラブ、四国大学（徳島市）などとの連携、地元高校生のボランティア参加など、協力者の幅を広げながら運営してきました。また、交通渋滞緩和のための駐車場整備や遊山広場整備等の資金をクラウドファンディングで募り、目標額を上回る資金を調達するなど、多くの人に支えていただいています。

主催者メッセージ



徳島県内を代表する川沿いの桜並木を生かし、地域の宝を守りながら、住民の絆を強め活性化につなげたいとの思いで「さくら祭り」を開催しています。川に浮かべた梶取船からのお花見やアメゴ(アマゴ)の釣り堀、トロッコ列車など楽しさ満載。近隣で開催の「阿波勝浦ビッグひな祭り」とともに、ご家族で楽しんでいただけます。

生名ロマンの会会長
戸川 幹雄さん





開催DATA

自治体名	徳島県勝浦町
自治体人口	4,825人 ※2022年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	生名ロマンの会
開催回数	20回
開催日	2023年3月25日～4月10日
開催場所	徳島県勝浦町生名「生名ロマン街道」周辺
観客数	約5万人



評価のポイント

●双六マップの案内で島内を楽しく回るアイデアがオリジナリティの高い工夫となり、受け入れるホスピタリティとしても相乗効果を生んでいる。
●住民主体で知恵を出し合い、背伸びせずにおもてなしを行う取り組みは、各地の参考になる。高島ならではの「資産」の活用方法をもう一工夫すると、さらに素晴らしいイベントになると感じる。
●双六のマップを活用することで、地域の特産から文化を巡る楽しさを引き出している。

令和６年開催日程

■開 催 日：令和6年3月9日
■開催場所：高島町
■問い合わせ先
・団 体 名　高島地区まちづくり推進協議会（高島地域センター内）
・住　　所　〒851-1392 長崎県長崎市高島町1728-1　・電話番号　095-896-3110
・URL　https://www.city.nagasaki.lg.jp/shimin/121000/121100/p002935.html

ふるさとキラリ賞

第28回
ふるさとイベント大賞

選考委員会表彰

しまめぐり双六（すごろく）IN高島

長崎市高島町は、長崎港の南西約14･5㌔の洋上に浮かぶ高島をはじめ、端島（軍艦島）、中ノ島、飛島の四つの島からなり、高島だけが有人島です。町の総面積は、四つの島を合わせて、1・34平方㌔で、長崎市と合併する前は日本で一番小さな町でした。

かつて高島は、端島とともに炭鉱で栄えた町で、かのトーマス･グラバーも佐賀藩との炭坑事業の共同開発・経営のためこの島を訪れました。高島炭坑と端島炭坑は最先端の設備を次々に導入して出炭量を増やし、日本の近代化を支えてきました。石炭採掘最盛期には高島・端島合わせて約22,000人が住み、島には高層アパートが建ち並んでいましたが、エネルギー革命により燃料の主役が石油に代わり、昭和49年に端島炭坑が閉山し、高島炭坑も昭和61年に閉山しました。現在では人口が282人と激減し、交流人口増加および定住促進を図るため、さまざまな施策を行ってきました。

施策の１つとして平成23年度から開催している「しまめぐり双六IN高島」は、島全体を双六のマップに見立て、サイコロを振って巡り、ゴールを目指すイベントです。各ポイントでは、特産品の「高島フルーティートマト」や「トマトパスタ」「トマトドレッシング」などの試食で食の魅力、「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産の一つである端島（軍艦島）・高島炭坑（北渓井坑跡）をはじめとする史跡の魅力、きれいな海を目の当たりにして食べるBBQ等でアウトドアの魅力、ボランティアスタッフとして参加している島民とのふれあいなど、双六という遊びを取り入れて、島の魅力を余すことなく発信しています。

イベントの開催を楽しみにするリピーターも増え、夏の海水浴客等、交流人口の増加の中心的な役割を担っています。

主催者メッセージ



高島地区まちづくり推進協議会会長

松尾 保さん

高島までは長崎港から高速旅客船に乗って約35分。ちょっとした船旅気分を味わえます。双六ではサイコロを振り、世界遺産の軍艦島（端島）、北渓井坑跡、特産品のトマト等を試食できるポイントがあり、高島を満喫しながらゴールを目指します。ゴール後にはBBQ、特産品の抽選会等、1日中楽しめるイベントとなっています。







開催DATA

自治体名	長崎県長崎市
自治体人口	395,842人 ※令和5年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	高島地区まちづくり推進協議会
開催回数	13回
開催日	令和5年3月11日
開催場所	高島町
観客数	約64人

次点

第28回
ふるさとイベント大賞

しばれフェスティバル

北海道東部のほぼ中央に位置する陸別町は1、2月の最低気温の平均値が日本一低いことから「日本一寒い町」として有名です。このある意味でマイナスな「日本一寒い」という点を逆手にとりイベントとして盛り上げていこうという逆転の発想から生まれたのが「しばれフェスティバル」です。昭和57年（1982年）の第1回開催以来、コロナ禍での中断をはさみ、多くの町民の協力により、令和5年2月に40回目の開催を迎えることができました。

フェスティバルのなかでも日本一の寒さという資源を活用したメインイベントが「人間耐寒テスト」です。参加者はバルーンマンションといわれる大きな氷のかまくらで、陸別町の日本一寒い極寒のなか一晩宿泊し、陸別町の寒さを思う存分体感（耐寒）していただきます。作成に約1カ月をかけ完成させるバルーンマンションは戸数制限があるため抽選となってしまいますが、日本一の寒さを体感したいという猛者たちが日本全国、そして海外から訪れ人気となっています。寒さをPRした「人間耐寒テスト」などの独創的なアイデアが全国メディアなどに取り上げられ、「陸別町は日本一寒い町」ということが北海道・全国で認識されてきています。また、陸別町内においても、実行委員が小学校でバルーンマンションの作成技術を出前授業で教えたり、イベント当日は、児童の皆さんにもダンス・太鼓のステージ等に出演・協力していただいたりするなど、老若男女問わず多くの町民に運営等にご協力いただいています。

そして、しばれフェスティバルから生まれた「しばれ君」というキャラクターが町のカントリーサイン等に採用されるなど、「しばれフェスティバル」が陸別町の新たな文化として根付き、継承されています。令和5年度については実行委員会体制の見直しを行うためイベントを中止しましたが、令和6年度に、また、新たな形での開催を継続してまいります。











次回開催日程

■開 催 日：令和7年2月1日～2日（予定）
■開催場所：陸別町ウエンベツ イベントセンター・イベント広場
■問い合わせ先
・団体名：しばれフェスティバル実行委員会事務局（陸別町役場産業振興課 商工業振興担当）
・住所：〒089-4311 北海道足寄郡陸別町字陸別東1条3丁目1番地
・電話番号：0156-27-2141
・URL：https://www.rikubetsu.jp/kanko/event/shibare/

開催DATA

自治体名	北海道陸別町
自治体人口	2,159人 ※令和5年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	陸別町
開催回数	40回
開催日	令和5年2月4日～5日
開催場所	陸別町ウエンベツ イベントセンター・イベント広場
観客数	約7,500人

次点

第28回
ふるさとイベント大賞

あっさぶふるさと夏まつり

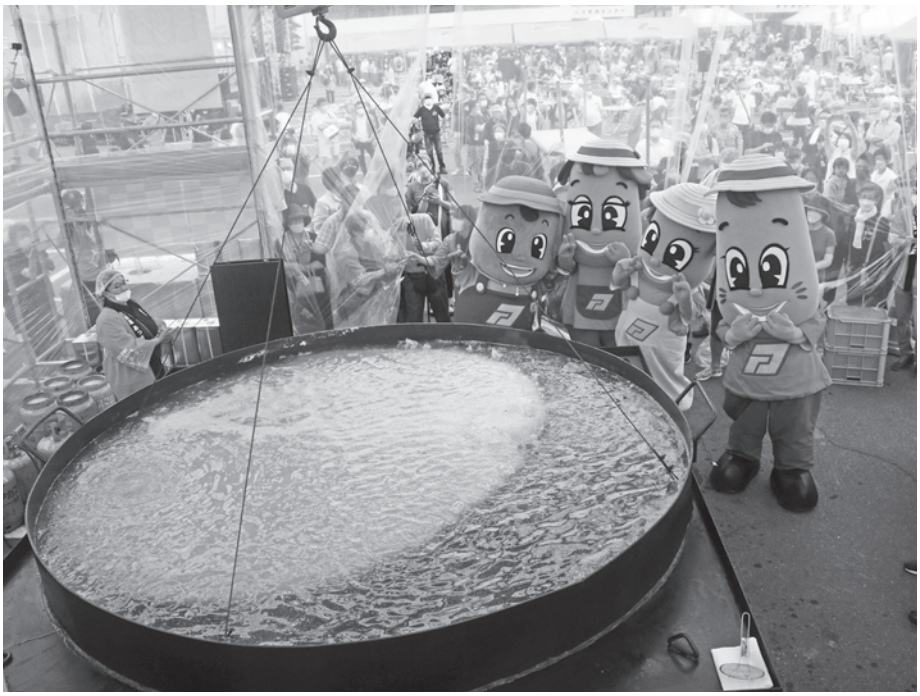
メークイン発祥の地「厚沢部町」。あっさぶふるさと夏まつりは、「名産のあっさぶメークインを利用したイベントで、マチのPRはできないか」と、厚沢部商工会青年部員が巨大メークインコロッケ製作を発案。「クワガタの里」として、クワガタ展示などのイベントも毎年夏に行っていたことから、平成16年から、町内のふるさと夏まつりに合わせて開催しています。

初のコロッケ製作となった平成16年は、直径1・5㍍のコロッケを製作。年を重ねた第3回目（平成18年）は2・1㍍の巨大コロッケを成功させました。材料となるメークインは180㌔。その他の具材を含めると250㌔にもなる巨大コロッケです。その夏にとれた新鮮なあっさぶメークインを使用するコロッケは、完成後、観客に振る舞われますが、大きさだけでなく、味も大好評です。

今回の第17回では、ジャンボコロッケで「ギネス世界記録®に挑戦!」と銘打ち、オランダの記録225・8㌔を超えるコロッケづくりに挑戦しました。当日の10時からコロッケ製作がスタートし、商工会青年部や実行委員会などが協力し、素早く手際のいい作業であっという間にジャンボコロッケが成形されていきます。制作過程の中でも重要なコロッケの裏返し作業。コロッケの種だけでも200㌔を超えるため、反対側に衣をつけるためにクレーン車で裏返します。大掛かりな作業には危険を伴いますが、青年部の息のあった作業でスムーズに行われると、観衆から大きな拍手が送られました。

その後、特注の巨大鍋で揚げられたコロッケは重さ279㌔を記録し、オランダのコロッケを超えることに成功しました。来場者の方々にコロッケが配布され、完食し、ギネス世界記録®に認定されました。

今回の挑戦は多くの方の協力や町が一つの目標に向かって団結したからこそ達成できたものだと思います。今後も「あっさぶメークイン」のPRにつなげていけるようイベントを継続していきたいと思います。











次回開催日程

■開 催 日：令和6年7月20日
■開催場所：厚沢部町役場駐車場
■問い合わせ先
・団体名：あっさぶふるさと夏まつり実行員会
・住所：〒043-1112 北海道檜山郡厚沢部町緑町72-1
　　道の駅あっさぶ内 厚沢部町観光協会
・電話番号：0139-64-3738
・Mail：assabu.kankoukyoukai@bz04.plala.or.jp

開催DATA

自治体名	北海道厚沢部町
自治体人口	3,405人 ※令和5年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	あっさぶふるさと夏まつり実行委員会
開催回数	17回
開催日	令和4年7月23日
開催場所	厚沢部町役場駐車場
観客数	4,500人

次点

第28回
ふるさとイベント大賞

第15回 鬼小十郎（おにこじゅうろう）まつり

白石市は伊達家重臣片倉小十郎の城下町であり、掘割や水路、武家屋敷などが今なお残る風情あるまちです。まちの象徴である白石城は、全国的にも数少ない純木造復元により江戸時代の姿が再現され、観光や地域振興の中心となっています。

この白石城という歴史資源とアクションゲーム「戦国BASARA」誕生による戦国武将ブーム、そして伊達政宗、片倉小十郎の人気向上を背景に、市内商店や事業者などが実行委員会を結成し、2008年、戦国の世を疑似体験できるイベントとして第1回鬼小十郎まつりが開催されました。以降、2020年、21年をのぞき毎年開催しており、入込数は毎回4,000人～6,000人を維持し、第15回は延べ6,000人が訪れました。白石市の伝統芸能や地場産品も堪能でき、武将や歴史、お城のファンをはじめ、市内外から多くの方が訪れます。

メインイベントは、大坂夏の陣で活躍し、「鬼小十郎」として名を馳せた片倉小十郎重長と「日の本一の兵」と呼ばれた真田幸村の激闘を再現した「大坂夏の陣 道明寺の戦い」です。幸村が大坂城落城前、子女の阿梅（おうめ）を重長に託した史実を、全国から募集したエキストラをはじめとする、片倉軍・真田軍総勢120名により再現します。片倉小十郎や真田幸村などの主役級エキストラは、役者やアーティストを目指す専門学生の中からオーディションにより選抜します。また、市内の小中高生や団体も弓隊や忍者隊、鉄砲隊として参加し、合戦を彩ります。本番まで3回の練習会を行い、参加者同士の結束を強めながら、イベントを作り上げている点も特徴です。地域住民も多様な形でまつりに関わることで、城下町という地域特性を再認識するとともに、甲冑（かっちゅう）のまち、歴史秘話を大切にするまちとして郷土愛を深めています。

今年、白石市は市制施行70周年を迎え、第17回鬼小十郎まつりはこの節目を祝う記念の回となります。この機会にぜひ鬼小十郎まつりへお越しください。









70th ANNIVERSARY

次回開催日程

■開 催 日：2024年10月5日
■開催場所：白石城本丸広場（宮城県白石市益岡町1）他
■問い合わせ先
・団体名：鬼小十郎まつり実行委員会事務局
（白石市市民経済部まちづくり推進課）
・住所：〒989-0292 宮城県白石市大手町1番1号
・電話番号：0224-22-1327
・URL：http://onikojuro.jp/

開催DATA

自治体名	宮城県白石市
自治体人口	31,229人 ※2023年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	鬼小十郎まつり実行委員会
開催回数	15回（13回、14回は新型コロナウイルスの影響で中止）
開催日	2022年10月1日
開催場所	白石城本丸広場（宮城県白石市益岡町1）他
観客数	約6,000人

次点

第28回
ふるさとイベント大賞

真夏のとうもろこし巨大迷路
ゴールドデント777WAKUYA2022



宮城県涌谷町は、749年（天平21年）に日本で初めて金を産出し、当時、平城京で聖武天皇によって造営が進められていた東大寺の大仏さまの鍍金（ときん）用の金として献納され、その完成へと導いた地です。

イベント名は、日本初の産金地としての歴史と、迷路を形作る飼料用とうもろこしデントコーンの品種「ゴールドデント777」に由来するものです。

本イベントは、コロナ禍真っただ中の2021年に、元々デントコーンを栽培していた酪農家を中心に、農家や地域おこし協力隊、行政職員らの有志が実行委員会を発足させ、始まりました。全国的にイベントが中止となり、子どもたちの思い出づくりの場が失われ続けている中、広大な農地であれば、感染症に気をつかうことなく、楽しめるイベントを開催できるのではないかという考えの下、約1ヘクタールの田んぼにデントコーンを栽培し、約3メートルまで成長したデントコーン畑の中を切り開いて迷路を完成させ、イベント後には、迷路となっているデントコーンを収穫し、最終的には乳牛の飼料とする循環型農業を基本とした迷路イベントを企画しました。

2021年開催では、夏休みの思い出を作りたいという家族連れが2日間で1,500人来場しました。その手応えを受け、2022年開催では、ほ場を移動し、約1・8ヘクタールにスケールアップさせました。迷路も涌谷町にちなんだ問題を解きながらゴールを目指すクイズラリーコースとゴールまでの時間を競うタイムアタックコースの2コースを整備しました。2日間の開催とも30度を超える真夏日にもかかわらず2,500人が来場し、コロナ禍をしばし忘れ、子どもも大人も熱中しました。

イベントの運営には、実行委員のほかに、町内の農業や商工業の担い手、地域のサークル・団体、行政の若手、高校生ボランティアが携わり、親睦を深める機会ともなりました。

コロナ禍を機に誕生したイベントですが、農作物を作るだけではない持続可能で循環型農業の新たな可能性に挑みつつ、涌谷町の新たな夏の風物詩となることを目指します。









次回開催日程

■開 催 日：2024年7月27、28日(予定)
■開催場所：宮城県涌谷町涌谷字富沢地内のほ場
■問い合わせ先
・団体名：涌谷デントコーン迷路実行委員会
・住所：〒987-0151 宮城県涌谷町小塚字笠石山56番地
（株式会社さいとう農場内）
・電話番号：090-8050-9786
・URL：https://www.facebook.com/golddent777wakuya

開催DATA

自治体名	宮城県涌谷町
自治体人口	14,628人 ※2023年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	涌谷デントコーン迷路実行委員会
開催回数	2回（2023年に第3回開催）
開催日	2022年7月30、31日
開催場所	宮城県涌谷町涌谷字富沢地内のほ場
観客数	約2,500人

次点

第28回
ふるさとイベント大賞

福島わらじまつり

古くより歌枕で知られる信夫山(しのぶやま)は、福島市の中央部に位置し、月山・湯殿山・羽黒山の三神社がまつられています。その羽黒神社の大わらじ（長さ12m）は日本一と称され、古来より健脚を願って毎年2月の「暁(あかつき)まいり」で奉納されます。大わらじは、昔、羽黒神社に仁王門があり、安置されていた仁王様の大きさにあったわらじを作って、奉納したのがはじまりといわれています。その後、伊勢参拝などの長旅に出かける人々が健脚、旅の安全などを祈って奉納するようになりました。近年は、無病息災･五穀豊穣･商売繁盛も願っています。

「暁まいり」は江戸時代から四百有余年にわたり受け継がれた伝統あるお祭りです。福島わらじまつりは、その「暁まいり」に由来し、日本一の大わらじの伝統を守り、郷土意識の高揚と東北の短い夏を楽しみ、市民の憩いの場を提供するまつりとして例年8月第一金曜日～日曜日に実施しております。また、大わらじ(片足分)を奉納することにより､「暁まいり」に奉納された大わらじとあわせて一足（両足分）とすることで、より一層の健脚を祈願する意味も込められております。

50回目には、わらじ音頭のリニューアルが行われました。リニューアル前との最大の違いは大人数の生演奏です。古くから福島に伝わる「福島盆踊唄」のリズムを参考に、古関裕而さんが作曲した「わらじ音頭」を編曲しなおし、新たに「わらじ太鼓みだれ打ち」をはじめとした楽曲を加えました。笛や太鼓といった古くから東北地方にある楽器を使っての巨大アンサンブルとなっています。

わらじ音頭に合わせて踊るわらじおどりは、わらじまつりの物語に添いつつ、老いも若きも、その人のレベルに応じてだれでも生演奏にあわせて楽しく踊れるものとなっており､「わらのわ」と呼ばれる輪を両手に持ちながら、健脚をイメージさせる下半身の動きに特徴があります。









次回開催日程

■開 催 日：令和6年8月2・3・4日
■開催場所：国道13号信夫通り・羽黒神社
■問い合わせ先
・団体名：福島商工会議所
・住所：〒960-8053 福島県福島市三河南町1－20 8階
・電話番号：024-572-7118
・URL：https://waraji.co.jp

開催DATA

自治体名	福島県福島市
自治体人口	267,924人 ※令和5年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	福島のまつり運営委員会・福島わらじまつり実行委員会
開催回数	53回（令和5年に第54回）
開催日	令和4年8月5・6・7日
開催場所	国道13号信夫通り・羽黒神社
観客数	約27万5000人

次点

第28回 ふるさとイベント大賞

JAPAN WORLD FILM FESTIVAL2022 in 常陸大宮

「ジャパンワールド映画祭」は世界の多様性と地域を愛でる映画祭として、オリジナルセレクトの国際短編映画上映に加え、ご当地グルメ等の地域の魅力を織り交ぜながら開催しています。

第2回の開催となった「JAPAN WORLD FILM FESTIVAL2022 in 常陸大宮」では、アニメやドラマなどバラエティに富んだ国際短編映画を20作品以上上映するとともに、映画監督によるトークタイムも設け、さまざまな方法で映画の多様性に触れることができるイベントを目指しました。映画上映以外には、地域と連携した魅力発信にも取り組み、会場付近にある国登録記念物「養浩園（ようこうえん）」の特別公開を同日に行いました。そのほか、市の特産品である枝物を使った、地元高校生による花いけパフォーマンスや、林業のまちならではの丸太切り競争などを実施し、会場を盛り上げました。

また、第2回開催では、新たな魅力づくりを目指して制作した地域PR映画「ブルーベリージャムを作って」を特別上映しました。本作品は市民が考案した物語をもとに、プロの俳優・スタッフと市民が一緒に市内ロケを行って制作したもので、世界各国12カ所の映画祭で受賞・ノミネート上映され、常陸大宮市の知名度アップに貢献することができたと考えています。

今後は映画祭の規模の拡大を目指しながら、地域を周遊できるようなスタンプラリーの実施など、さらなる地域の魅力発信につなげられるイベントを目指していきます。また、第2回で実施した地域PR映画づくりを毎年続けていくほか、2023年開催の第3回で取り組んだ常陸大宮市初の市民ミュージカルのプロデュースのように、引き続き市民の皆さんとつくることを大切にしながら、地域とのかかわりを深め、芸術を身近に感じられるような場づくりや、参加型の体験イベントとして映画祭を育てていきたいです。











次回開催日程

■開 催 日：8月17日～ 18日
■開催場所：緒川地域センター（茨城県常陸大宮市上小瀬1259）
■問い合わせ先
・団体名：JAPAN WORLD FILM FESTIVAL in 常陸大宮実行委員会
・住所：〒319-2405 茨城県常陸大宮市小玉422
・Mail：jwff.miwa@gmail.com
・URL：https://www.jwff.jp/

開催DATA

自治体名	茨城県常陸大宮市
自治体人口	37,194人 ※2023年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	JAPAN WORLD FILM FESTIVAL in 常陸大宮実行委員会
開催回数	2回（2023年に第3回を開催）
開催日	2022年9月10、11日
開催場所	旧美和中学校（茨城県常陸大宮市高部454）
観客数	401人

次点

第28回
ふるさとイベント大賞

SUN-IN 未来ウオーク

SUN-IN未来ウオークは毎年6月に開催される山陰地方最大のウオーキング大会です。重要伝統的建造物群保存地区である赤瓦・白壁土蔵群といった歴史と文化あふれる倉吉市をはじめ、日本遺産のまち三朝町、東郷池の風光明媚な景色が広がる湯梨浜町、「名探偵コナン」の作者青山剛昌のゆかりの地である北栄町、山あり海あり雄大な自然に囲まれた琴浦町といった1市4町を楽しみながら歩きめぐることができます。

四つの温泉郷を2日間にわたって楽しむ「SUN-IN未来ウオーク」は、中高校生や市民のボランティアが温かくもてなし、参加する全国のウオーカーが増加。コロナ禍が明けた昨年、22回目を迎えた未来ウオークは、ボランティアと合わせて延べ2600人の参加でにぎわいました。

大会を運営する認定NPO法人未来は、地元PTAの保護者たちを中心に地域活動を開始し、輪を広げながら地域の明るい未来の実現に向けた活動を継続してきた団体です。

地域に根差す一方で力を入れているのが国際交流です。「地球規模で考え、足元（地元）から行動を」という〝グローカルの精神〟を活動の柱に、2004年の韓国の大会参加をきっかけに大韓ウオーキング連盟と友好協定を締結。2016年には世界33カ国約300人、延べ参加者4000人が参加した国際交流大会（WTC）を地元で実現し、さらに昨年は台湾の千里歩道協会と連携協定を締結しました。

また、SUN-IN未来ウオーク第20回大会時には、日本全国、さらには国外からも広く参加を募って2020アジアウオーキングフェスタとして記念大会を企画していましたが、新型コロナまん延に伴い延期し、2023年の開催にこぎつけ、民間主導での国際交流にも取り組みました。

それでも鳥取県は男女そろって「歩かない県民ランキング」で上位の常連。歩くことで子供から高齢者まで元気で暮らせる健康長寿の県を目指して、平井伸治県知事と共に「ウオーキング立県とっとり」を宣言。私たちの挑戦はまだ始まったばかりです。











次回開催日程

■開 催 日：2024年6月1、2日
■開催場所：倉吉パークスクエア ふれあい広場
■問い合わせ先
・団体名：認定NPO法人未来
・住所：〒682-0826 鳥取県倉吉市東仲町2571
・電話番号：0858-24-5725
・URL：https://npo-mirai.net/public/

開催DATA

自治体名	鳥取県倉吉市、三朝町、湯梨浜町、北栄町、琴浦町
主催団体	認定NPO法人未来
開催回数	22回
開催日	2023年6月2、3日
開催場所	倉吉パークスクエア　ふれあい広場
観客数	延べ2,600人

次点

第28回
ふるさとイベント大賞

千年未来工藝祭

福井県越前市には、越前和紙、越前打刃物、越前箪笥（たんす）の三つの伝統工芸があります。そんな「モノづくりのまち・越前市」で毎年8月下旬に開催されているのが「千年未来工藝祭」です。

千年未来工藝祭は、越前市の伝統工芸をはじめとした職人の技や製品、人柄に触れてもらい、工芸や手仕事を身近に感じてもらうとともに、次世代への継承のきっかけづくりを目指すマーケットイベントです。令和5年8月26、27日に開催した第6回には、163事業者が出展、12,000人が来場し、出展者数、来場者数ともに過去最高を記録しました。

千年未来工藝祭には、伝統工芸を中心に、さまざまな分野の職人やクリエイターが地域を越えて多数集結します。会場内には暗幕を設置し、他のマーケットイベントとは異なる夜市のような雰囲気の中、作品の展示販売、ワークショップなどを通して、作り手自らが普段は直接交流する機会のないエンドユーザーに対し、製品に込めた思いやモノづくりの技を紹介しています。

運営主体は、越前市の伝統工芸の産地組合や若手職人を中心に構成する実行委員会です。実働部隊となるワーキンググループに属する若手職人は、企画の立案や検討のほか、自身のSNSを活用した情報発信も行っています。

目玉コンテンツの一つである「若手職人チャレンジプロジェクト」では、職人歴5年目以内の若手職人が自らのアイデアで制作した作品を販売しています。令和5年度には、千年未来工藝祭での販売から発展し、ポップアップイベントも実施しました。さらには、ふるさと納税返礼品への登録を目指して、作品制作に取り組んでいます。

このように、若手職人を中心に、産地が一体となってイベントを作り上げていることこそが、千年未来工藝祭の最大の特長です。今後も、さらに質の高い、魅力あるイベントとなるように、産地の力を結集して取り組んでまいります。











次回開催日程

■開 催 日：令和6年8月下旬
■開催場所：越前市アイシンスポーツアリーナ
■問い合わせ先
・団体名：クラフトフェス実行委員会事務局（越前市産業観光部伝統工芸振興課）
・住所：〒915-0071 福井県越前市府中一丁目13番7号
・電話番号：0778-42-5289
・URL：https://craft1000mirai.jp/

開催DATA

自治体名	福井県越前市
自治体人口	79,907人 ※令和5年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	クラフトフェス実行委員会
開催回数	6回
開催日	令和5年8月26、27日
開催場所	越前市アイシンスポーツアリーナ
観客数	約1万2,000人

次点

第28回
ふるさとイベント大賞

勝山左義長（さぎちょう）まつり

左義長は全国各地で行われている、正月でお迎えした歳神様をどんど焼きで送る小正月の行事で、勝山では町内が度々大火事に見舞われたことから五穀豊穣と鎮火などを祈願する。お囃子（はやし）に合わせた浮き太鼓や作り物、絵行灯（あんどん）など、町人の娯楽文化の集大成が行われ、雪深く長い冬を乗り越え、新しい春を呼ぶまつり。（このまつりが終わると冬が終わり、春がやって来るという考え方）

確認できる最も古い文献では、1748年（寛延元年）以前から町内の行事として定着していたと推測される。西暦1691年（元禄4年）に美濃国高須より勝山藩に移封（国替え）した小笠原貞信公以来、小笠原藩は明治まで8代続く。宝暦年間（西暦1751~1763年）の5代藩主信房公の頃、藩主の奨励もあり左義長は盛んになっていく。

櫓（やぐら）の上は、打ち手など赤い襦袢（じゅばん）をまとった大人の男性が中心であったが、三味線と唄は昭和50年頃までは主に勝山の芸妓（げいぎ）衆が担っていた。その後芸妓さんが少なくなり、昭和47年から「子供ばやしコンクール」が開催されるなか、左義長保存会による三味線講習会などが盛んに行われ、子供の保護者を中心に一般の女性らが三味線や笛等の楽器を担うようになった。現在、左義長ばやし保存会の演技では、浮き太鼓、三味線、唄などをオールラウンドにこなす女性会員も多い。

「絵行燈」は、小笠原藩主が、「無礼講」として左義長で古川柳や狂歌に庶民の気持ちを託すことを許したのがルーツである。「作り物」は江戸時代から続く「勝山にわか」の流れをくみ、素材を生かした即興性が特徴とされる。古い生活道具を金屏風の前に並べる「作り物」は、その年の干支（えと）や吉祥、世相や政治、経済、世界情勢などの関わる主題を表現する。全体の調和と意外性が見どころであり、素朴で想像力豊かな作品でなければならないとハードルが高い。素材は古い道具を中心に身近な生活用具を主体とし、「五七五七七」を基調とした狂歌（書き流し）を添え、作品との調和の妙を楽しむ。











次回開催日程

■開 催 日：令和7年2月22、23日
■開催場所：勝山市町内
■問い合わせ先
・団体名：勝山左義長まつり実行委員会
（勝山市未来創造課）
・住所：〒911-8501 福井県勝山市元町1丁目1-1
・電話番号：0779-88-8114
・Mail：mirai@city.katsuyama.lg.jp

開催DATA

自治体名	福井県勝山市
自治体人口	21,483人 ※令和5年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	勝山左義長まつり実行委員会
開催回数	不明＝1748年（寛延元年）以前より開催
開催日	毎年2月の最終土曜日、日曜日
開催場所	勝山市町内
観客数	約8万人（令和6年2月）

次点

第28回
ふるさとイベント大賞

オペラ「御柱（おんばしら）」

御柱祭は、7年に一度、はるか昔から諏訪の地で寅（とら）と申（さる）の年に執り行われる神事「式年造営御柱大祭」です。宝殿の造り替え、御柱を選び、山から曳（ひ）き、境内に建てる一連の神事を通称「御柱祭」と呼び、諏訪大社の中でも最大にして最も重要な神事とされています。1200年以上も連綿と受け継がれ、諏訪6市町村の氏子たちが奉仕する御柱祭は、諏訪の誇り高き伝統文化でもあります。

創作オペラ「御柱」は、この御柱祭を題材としたオペラです。古代のスワ（諏訪）地方に時代設定をしたフィクションの神話オペラであり、ヤマト国との戦に破れ、神龍の奇跡によってスワ湖西に漂着した出雲の若者ミナカタが、スワ一帯の雄大な自然とその神々しさに魅かれ、生まれ変わった命をスワのために投げ出そうと決意する物語です。

御柱祭の開催年に合わせて上演を続けてきた創作オペラ「御柱」は、市民が出演者として参加するだけでなく、制作にも深くかかわることで地域の芸術文化発信のひとつの柱として再演が続けられています。本公演に向けた気運を高めるため、市民主体のオペラに親しむ会「すわ人オペラ旅」との共催企画によるオペラの上演や舞台吊り幕製作のワークショップの開催など、地域住民の交流企画も行われています。また、これまで5回の公演を開催していますが、開催の都度、ノウハウを学び、その知見を最大限生かし、工夫研鑽を重ね、現在は、プロに頼らず制作全般を成し遂げるに至っており、地元住民中心の手作りの公演となっていることもひとつの特色です。

実行委員会、出演者、ボランティアは小学生から70歳代まで幅広い年齢層が参加し、過去に子供で出演した参加者が、今回は大人の役として出演するなど世代交代と継承が実現しており、将来的には、市民主体の実行委員会が制作から運営に至るまですべて行えるようにし、世代を超えて受け継がれる「もうひとつの御柱」として継承、発展を目指しています。











次回開催日程

■開 催 日：未定
■開催場所：未定
■問い合わせ先
・団体名：公益財団法人おかや文化振興事業団
・住所：〒394-0029 岡谷市幸町8番1号
・電話番号：0266-24-1301
・URL：https://canora.or.jp/

開催DATA

自治体名	長野県岡谷市
自治体人口	47,038人 ※令和5年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	公益財団法人おかや文化振興事業団
開催回数	5回
開催日	令和4年11月27日
開催場所	岡谷市文化会館 カノラホール
観客数	1,100人

次点

第28回
ふるさとイベント大賞

第28回信州爆水 RUN in 依田川

夏の自然を満喫しながら、依田川・内村川の中を駆け抜けるといった全国でも珍しいイベントです。地域住民の協力を得て、1996年から続いている大会で、2023年8月で28回目を迎えました。このイベントでは人と川との関係を見つめなおし、忘れかけた川の魅力を再発見し、水辺に親しみ潤いとふれあいのあふれる豊かな河川環境の保全と利用を図るとともに、環境問題への意識の高揚と啓発を図ることを目的としています。

本イベントでは、地域の川（依田川・内村川）を積極的に活用し、大会のコースに取り入れています。単にタイムを競うレース形式のコースだけでなく、ファミリー向けのコースもあるため、年代・性別を問わずに参加が可能で、とても参加しやすい大会となっています。

また、開催場所である上田市丸子地域特産物を表彰者の賞品にするなど、その地域ならではのものを積極的に取り入れて大会を行っています。川の中を走るという全国的にも珍しいイベントによって、参加者の満足度の向上や多くの人を引きつける魅力につながっています。

本イベントは、全国から参加者があり、丸子地域の知名度向上につながっています。また、川などの自然環境にレースを通して触れてもらうことによって、丸子地域への関心がより高まっています。そして、川の中を走るという珍しいイベントは、他の地域にない新たな文化の創出にもつながり、地域住民の環境保全への関心の高まりにもつながっています。

運営に関しても、地域のスポーツ協会やスポーツ少年団とも連携し、地域ぐるみで大会の運営を行っています。また、地域の消防団にも協力してもらい、コースの監視を担当していただいており、より安全な大会を目指しています。

今後も地域一体となって「爆水RUN in 依田川」を盛り上げていきます。











次回開催日程

■開 催 日：2024年8月4日
■開催場所：依田川および内村川周辺
■問い合わせ先
・団体名：信州爆水RUN in 依田川実行委員会
・住所：〒386-0412 長野県上田市御嶽堂1-1
・電話番号：0268-43-2250
・URL：http://www.bakusui-run.jpn.org/

開催DATA

自治体名	長野県上田市
自治体人口	152,484人 ※2023年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	信州爆水RUN in 依田川実行委員会
開催回数	28回
開催日	2023年8月6日
開催場所	依田川および内村川周辺
観客数	500人

次点

第28回 ふるさとイベント大賞

駅とまちを光でつなぐ杜のイルミネーション

岐阜駅北口駅前広場は、全国有数の広さを誇る面積を生かし、交通結節機能の強化はもとより、にぎわい空間の創出や、岐阜らしさのデザインを随所に取り入れ、広場全体に緑を配した「杜の駅」として平成21年に整備され、イベントが開催されるなど、多くの方にご利用いただいています。

令和元年には、岐阜駅北口駅前広場の完成10周年を機に、広場周辺のにぎわい創出や活性化を目的に、岐阜市や地元企業・団体で組織された「岐阜駅周辺活性化実行員会」を発足し、「駅とまちを光でつなぐ杜のイルミネーション」を初めて開催しました。

岐阜の冬の風物詩として定着しつつある本イルミネーションは、当初約2万球だったLED電球は約14万球に、駅前広場からまちなかへエリアを広げるなど、年々規模を拡大しながら実施しています。

本イルミネーションは、通常のLED電飾に加え、美濃和紙を用いて作られた国指定の伝統工芸品である「岐阜和傘」「岐阜提灯（ちょうちん）」のライトアップ、令和5年度はさらに岐阜の伝統工芸品である「美濃筒引き本染め技法」で染付けられたのぼり旗をライトアップするなど、岐阜の魅力を存分に感じることができるような空間を演出しています。

また、高校生が企画・制作した瓢箪（ひょうたん）イルミネーションの鮮やかな演出や、地元まちづくり協議会が主催したワークショップにおいて小中学生が製作した竹灯りの幻想的な光など、地域の皆様のご協力をいただく等、産官学が一体となって取り組んでいます。

今後も、岐阜らしさがあふれる魅力的な空間を創出しながら、多くの方に幻想的な光のエールをお届けできるようイルミネーションを実施してまいります。



撮影：小林　淳




撮影：小林　淳





次回開催日程

■開 催 日：令和6年11月15日～令和7年2月24日（予定）
■開催場所：岐阜駅前広場から金公園付近
■問い合わせ先
・団体名：岐阜駅周辺活性化実行委員会
（事務局：岐阜市都市建設部鉄道高架推進課）
・住所：岐阜市司町40番地1
・電話番号：058-214-4684
・Mail：tetsudou-kouka@city.gifu.gifu.jp

開催DATA

自治体名	岐阜県岐阜市
自治体人口	401,119人 ※令和5年12月現在の住民基本台帳人口
主催団体	岐阜駅周辺活性化実行委員会
開催回数	5回（令和5年度を含む）
開催日	令和5年11月17日～令和6年2月25日（第5回）
開催場所	岐阜駅前広場から金公園付近
観客数	約11万人

次点

第28回
ふるさとイベント大賞

秩父宮記念
富士登山駅伝競走大会

毎年8月第1日曜日、世界文化遺産である富士山を舞台に開催される、富士山の麓にある御殿場市だからできる駅伝大会です。大きな特徴は、選手が上り下りの両方を担当しタスキをつないでいくことで、高低差3,199㍍、気温差20数度、全長48.19㌔、日本一過酷な駅伝大会です。

大会の発祥は大正2年にまでさかのぼり、日本初のオリンピアンであり、マラソンの父とされる金栗四三氏が立ち上げました。太平洋戦争により一時中断する憂き目にあいましたが、昭和51年に地元有志らの尽力により復活しました。

戦後復活第1回大会開催時には38チームだった参加チームも、今や100以上のチームが参加する大会になりました。平成2年には富士山と御殿場の自然をこよなく愛された秩父宮家より、秩父宮杯が特別に下賜され、総合優勝チームに秩父宮賜杯が贈られています。

第48回大会では、国内外へ大会の魅力を発信するため、東アジア文化都市2023静岡県の補助金を活用してPR映像を制作しました。下記2次元バーコードから是非ご視聴ください。

今後も、御殿場市陸上競技協会をはじめとする、スポーツ協会加盟団体、消防団、スポーツ推進委員会、体育振興連絡会、陸上自衛隊など多くの地元関係者と協力し、令和7年度には第50回を迎える素晴らしい大会を継続していけるよう活動していきます。

本編（英語字幕）

短編









次回開催日程

■開 催 日：令和6年8月4日
■開催場所：御殿場市陸上競技場・富士山
■問い合わせ先
・団体名：御殿場市陸上競技協会
・住所：〒412-0022 静岡県御殿場市清後560-1
・電話番号：0550-84-0414（事務所には常駐者がおりません）
・URL：https://gotemba-rk.jimdofree.com/

開催DATA

自治体名	静岡県御殿場市
自治体人口	84,240人 ※令和5年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	御殿場市
開催回数	48回
開催日	令和5年8月6日
開催場所	御殿場市陸上競技場・富士山
観客数	3,000人

次点

第28回
ふるさとイベント大賞

青野原俘虜収容所レミニセンス

大正4年9月、加西市青野原町に開設された青野原俘虜収容所は、第一次世界大戦時、中国で捕虜となったドイツ帝国とオーストリア=ハンガリー帝国の捕虜兵（当時の表現で「俘虜」）、約500人が収容されていました。当時の日本は、捕虜を「人道的に取り扱わなければならない」という国際的なハーグ陸戦条規を批准しており、いくつかの制約はありましたが、捕虜は比較的自由に過ごすことができました。大正9年1月までこの地で過ごした様子は、当時の捕虜が撮影した写真や日記、国立公文書館資料等からうかがうことができ、サッカー、テニス、ボウリング、演劇会・演奏会、周辺の名所旧跡への遠足など、文化活動が認められ、周辺地域の人々とのさまざまな交流がありました。

青野原俘虜収容所レミニセンスは、捕虜が持ち帰った写真の展示、研究者による講演、捕虜が行っていた演奏会を再現する「青野原楽団」のコンサートを開催し、それに併せ、地産野菜等の即売会も行っています。さらに、時期をずらして市内の小学校6年生を対象に小規模の写真展、説明会で戦争歴史学習を行い、別途、青野原俘虜収容所語り部養成講座を開設し、ボランティアガイド養成および保存会員のブラッシュアップに努めています。さらに、捕虜が歩いた道を歩くウォーキングも行っています。

令和3年度には、こちらからの呼びかけに応え、ドイツ総領事やハンガリー大使館書記官なども視察に訪れました。令和4年1月2日には、ハンガリー国営テレビで放映されるなど、直接海外とのつながりを持つに至りました。

青野原俘虜収容所跡は、当時の捕虜が使用した風呂棟（兵庫県登録文化財）が当時の場所にそのまま現存しており、当時の収容所区画をそのままに住民が暮らしているなど、貴重な歴史遺産です。戦時にもかかわらず、加西市や周辺の方々とヨーロッパの人が仲良くしていたことを世界中に知らしめ、戦争のない世界をつくっていきたいと考えています。











次回開催日程

■開 催 日：令和6年11月10日～17日
■開催場所：青野原町公会堂（青野原俘虜収容所跡地）
■問い合わせ先
・団体名：ももこの11（富合地区ふるさと創造会議）、
青野原俘虜収容所跡保存会
・住所：〒679-0108 兵庫県加西市山枝町31-2
・電話番号：090-2706-2817、0790-47-1470
・Mail：nakai.masato@leto.eonet.ne.jp
※イベントの詳細は、確定次第お知らせします。

開催DATA

自治体名	兵庫県加西市
自治体人口	41,928人 ※令和5年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	ももこの11（富合地区ふるさと創造会議）、共催・青野原俘虜収容所跡保存会
開催回数	1回
開催日	令和5年10月28日～11月5日
開催場所	青野原町公会堂（青野原俘虜収容所跡地）
観客数	写真展800人、演奏会180人、講演会50人

次点

第28回
ふるさとイベント大賞

NIGHT WAVE
~光の波プロジェクトin ZUSHI~

このプロジェクトは2015年に地元の演出家やアーティスト、照明デザイナーなどを中心に、夏以外の逗子海岸を活用して、その魅力を高め発信する目的で立ち上がりました。

NIGHT WAVEとは、LED光源の省エネルギーで特殊な照明を用いて、波しぶきに青い光を照射し、まるで波が光っているかのように見える、自然を使ったアートです。自然の波の表情を利用し、ゆったりとした時間を体験できるこのイベントは、普段あまり訪れる機会のない夕方から夜間の海岸に特別な情景を創り出すことで、話題を呼び、市内外から多くの人々を集めます。そして単なる写真映えするイベントにとどまらず、NIGHT WAVEを軸として、地域密着型の多種多様な連携企画が生まれ、人々の交流の場ともなっています。

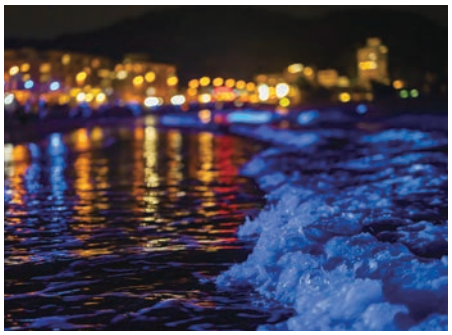
例えば、市民有志による「Zushi Beach Candle」は、「みんなでつくる」をコンセプトに、300人以上の地域の子どもたちが砂浜に1万本以上のキャンドルを並べて、大きな地上絵を描きます。子どもたちが海岸で心に残る情景を一緒につくる時間を過ごすことを通して、地域への愛着を育んでいます。

また、青い波とのコラボが美しい「Light Up Windsurfing」では、世界で活躍する逗子ゆかりの若手プロウインドサーファーたちが、光る帆を使って海上で演技します。マリンスポーツを知らない方に、その魅力と高い技術力を持つ地元アスリートの存在を、直接知っていただく良い機会となっています。

さらに、市内の多様なダンスクラブによるステージ企画との連携では、昼間から開催することで滞在時間を伸ばし、地域の観光消費を促すことに貢献しています。

このようにNIGHT WAVEが創り出す特別な空間での唯一無二の体験は、鮮やかな記憶をもたらすとともに、多様な人々が一体となる機会をも創出し、逗子海岸の秋の風物詩となっています。地形に合わせた演出プロデュースや資機材の貸し出しも行っていますので、海岸を活用した地域活性化に向け検討されている方はお気軽にお問い合わせください。









次回開催日程

■開 催 日：未定（例年10月頃開催）
■開催場所：逗子海岸
■問い合わせ先
・団体名：NIGHT WAVE実行委員会
・住所：神奈川県逗子市逗子5-2-16（逗子市観光協会内）
・電話番号：046-873-1111（内線286）
・URL:https://www.zushitrip.com/spot/detail_473.html
（【公式】逗子市/観光ワーケーションサイト 逗子旅）

開催DATA

自治体名	神奈川県逗子市
自治体人口	55,988人 ※2024年1月1日現在の住民基本台帳人口
主催団体	NIGHT WAVE実行委員会
開催回数	8回（2023年に第9回開催）
開催日	2022年10月22、23日
開催場所	逗子海岸
観客数	26,600人

次点

第28回
ふるさとイベント大賞

美作三湯芸術温度2022

岡山県北部に位置する湯原温泉・奥津温泉・湯郷温泉は、本県が誇る有数の温泉地で、美作三湯と称されています。美作三湯芸術温度は、美作三湯の温泉宿に県内外の気鋭のアーティストを招きアート作品を展示する回遊型のアートイベントで、2016年から3年ごとに開催しています。

美作三湯芸術温度という一風変わった名称には、「お湯のぬくもり」「温泉宿のあたたかいおもてなし」「アート鑑賞した後の感動や発見」「アーティストの熱意」など、実際に体感することで得られるさまざまな感覚を「温度」という言葉に託し、訪れる人にこの温度を感じてもらいたいという思いが込められています。

関係者の全面的な協力の下、このイベントでは、温泉宿のロビーや客室、中庭などにアート作品を展示します。温泉宿がアートギャラリーになるため、来場者は作品を楽しむと同時に温泉宿の独特の雰囲気も味わえます。宿泊者以外にはちょっと敷居が高い温泉宿と来場者との距離の近さ、これが美作三湯芸術温度の最大の特徴ではないでしょうか。

3回目となる「美作三湯芸術温度2022」は、「温泉×アート」をテーマに2022年8月から12月の100日間開催し、25の温泉宿等に過去最多となる26人のアーティストが絵画、彫刻、テキスタイル、インスタレーションなど多様なジャンルの作品を100以上展示しました。併せて、会場周辺の美術館やギャラリーとコラボし連携企画展を開催していただくなど、回を重ねるごとにその取り組みは広がりを見せています。

第1回は約10万人だった来場者数は約12万人まで増加し、アートの力による地域活性化を目指すこのイベントが3年に一度の風物詩として地域に定着していることを実感しています。

美作三湯芸術温度が来場者の皆様の心の温度を高めることができるよう、そして美作三湯はもとより周辺地域が一層盛り上がるよう、引き続き、取り組みを進めていきたいと思っています。











次回開催日程

■開 催 日：未定（2025年秋ごろを予定）
■開催場所：美作三湯の旅館・ホテル等
■問い合わせ先
・団体名：岡山県環境文化部文化振興課
・住所：〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下二丁目4番6号
・電話番号：086-226-7903
・URL：https://www.pref.okayama.jp/

開催DATA

自治体名	岡山県
自治体人口	1,865,478人 ※令和2023年1月1日現在の住民基本台帳人口
主催団体	岡山県
開催回数	3回
開催日	2022年8月27日～12月4日（100日間、3年に1回の開催）
開催場所	美作三湯（湯原温泉、奥津温泉、湯郷温泉）の旅館・ホテル等25カ所
観客数	12万4000人

次点

第28回 ふるさとイベント大賞

音戸清盛祭（おんどきよもりさい）

音戸清盛祭は、平清盛公が音戸の瀬戸を開削した功績をしのぶために、月明かりの下で太鼓に合わせて念仏を唱えながら踊り明かした「念仏踊り」が起源とされています。安政5年（1858年）には、百万石の格式をもつ「大名行列」となっており、160年以上の歴史があります。

昭和54年に、音戸町の無形文化財に指定され、平成17年3月呉市との合併により呉市の無形文化財として引き継がれました。現在では5~6年に1度開催されており、戦後は、令和5年が10回目の開催となります。

総勢400人余りが、大名行列の衣装や装飾を身にまとい伝統の踊りや唄をうたいながら、行列が進みます。行列の中には、平清盛が音戸の瀬戸を開削する姿を模した「瀬掘り」と呼ばれる子どもの踊りや、開削工事を検分する「お舟」と呼ばれる御座舟など、他の大名行列にはない独特なものも見られます。また、4人一組で毛槍を投げ渡しながら行進する「投げ奴」は音戸清盛祭の花形とされており、勇壮な姿は見るものを魅了します。

実施主体は、地域団体等が組織した実行委員会が企画運営を担っていますが、多くの団体が高齢化や後継者不足等の課題を抱えており、出場者の確保や、道具衣装などの整備・修繕に苦慮しています。

このような中でも、小中学生が授業に取り入れたり、地元高校生など若い世代に積極的に関わってもらったりすることで、音戸清盛祭という歴史ある伝統文化を後世に継承していきたいと考えています。









次回開催日程

■開 催 日：令和10年春
■開催場所：呉市音戸町
■問い合わせ先
・団体名：音戸清盛祭実行委員会（音戸市民センター）
・住所：〒737-1205 呉市音戸町南隠渡1丁目7番1号
・電話番号：0823-52-1111
・URL：https://kiyomorimatsuri.com/

開催DATA

自治体名	広島県呉市
自治体人口	205,349人 ※令和5年12月末現在の住民基本台帳人口
主催団体	音戸清盛祭実行委員会
開催回数	戦後は昭和27年以降10回
開催日	令和5年5月28日
開催場所	呉市音戸町
観客数	約2万人





瀬戸内香川









うどん県それだけじゃない香川県

うどん県それだけじゃない香川の観光情報は
うどん県旅ネット　検索

うどん県

都道府県漫遊 POSTER GALLERY

香川県

地域づくり5月号 特集編（通巻419号） 第28回ふるさとイベント大賞 令和6年5月1日 一般財団法人 地域活性化センター発行


一輪車


宝くじ桜


子宮がん検診車

宝くじは、みんなの暮らしに役立っています。


救急普及啓発広報車


宝くじドリームジャンボ絵本



集会用テント


「健康手帳」（冊子）


ベンチ


リスザル展示施設

宝くじは、少子高齢化対策、災害対策、公園整備、
教育及び社会福祉施設の建設改修などに使われています。

あなたに夢を。街に元気を。
クーちゃん 宝くじ

一般財団法人日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や
公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。

一般財団法人
日本宝くじ協会
https://jla-takarakuji.or.jp/